
俺による、俺のための妹育成計画！

蒼井 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺による、俺のための妹育成計画！

【Nコード】

N1720S

【作者名】

蒼井 空

【あらすじ】

妹が大・大・大好きな主人公、御堂拓也みどうたくやが血の繋がった双子の妹たちを自分の理想の妹として育てようと奮闘するおバカなお話です。

【Part・i】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じてもらえたら嬉しいです。

【Part・1】

「お兄ちゃん起きて、朝だよ」

うーん、まだ寝ていたいのに……。

「お兄ちゃん、学校に遅刻しちゃうよ」

学校？ いいよ別に、遅刻しても……。
だから、もう少し……。

「もう、お兄ちゃんったら……。は・や・く・お・き・な・い・
と……チューしちゃうからねっ」

え？ な、何！？ チュ、チュー！？ い、妹と……チュー……。

こ、これは何というビッグチャンス！ そして、何て美味しいシ
チュエーション！ こんなチャンス、絶対に逃せん！ てか、逃し
てなるものか！

俺はゆっくりとした動作で、閉じられていた瞼をほんの少しだけ
開いてみた……。

すると、何と妹の顔が俺の目の前にあった！

そして、妹の顔を見た瞬間、俺は半ば反射的に妹の背に素早く手
を回し、こちらに抱き寄せた。

そして、妹とキ、キスを……。

「じ、実の妹に何をしようとしてんだ！ このエロ兄貴ー！」

そんな妹の怒声が耳元に響いた瞬間、突然強烈な痛みが俺の左頬を襲った。

俺はその激しい痛みによって、心地良かった夢の世界から過酷な現実世界へ強制的に戻された。

そして俺の目の前には、怒りのオ・ラを纏っている妹が拳を握りしめワナワナと震えて立っている。

「いてててて……。お、お前なあ、いきなりグーで殴る事ないだろ」

俺はヒリヒリと痛む頬を手で抑えながら、夏香^{なつか}へ抗議した。

「何言ってるのよ！ わざわざエロ兄貴なんかを起こしに来てやってたっていうのに！ それが突然、キスされそうになったら殴るしかないでしょ！」

夏香は、目をつり上げて激怒している。

「ちよ、殴るしかないって……。寝ぼけてただけなのに……」

俺は、潤んだ瞳で夏香を見つめた。

「寝ぼけてようが何をしようが、どこの世界に妹の唇を奪おうとする兄貴がいるのよ！」

俺は口元に笑みを浮かべ、右手の親指を自分の顔に向けて

「じじじいるぜっ！」

と言った瞬間、また殴られた・・・。

「もう！ 朝っぱらから余計な体力使わせないでよ！ これから部活の朝練があるんだから！ 時間がないんだから朝御飯とお弁当、早く作ってよね！」

そう言っつて、夏香は勢い良く扉を閉めて部屋から出ていった。

「はあく、朝っぱらから妹に殴られるとは最悪だ・・・。それにしても、いい夢だったなあ。もうちよつとで、妹とキスを・・・」

・・・て、あれ？ さつき起こされる時、「お兄ちゃん」って呼ばれていたよな？ 夏香なら、いつも俺の事を「兄貴」って呼んでいたはずなんだが・・・。

そういえば、あの声・・・何だか昨日寝る前にやってたギャルゲの妹キャラ、亜美ちゃんに似てたような・・・。

うーん、まあ夢の中だから、きつと何でもありなんだろうよ。

俺はヒリヒリと痛む頬を撫でながら、さつきの夢の続きを想像して、必ず夢ではなく現実の出来事に見せると決意を固めた。

「おっと、いつまでも妄想に浸ってる場合じゃないな。早く朝飯とお弁当の用意をしないと、また夏香に殴られちまう」

俺はさっさとトレーナーに着替えて下へ降り、キッチンへと入っていく。

御飯は早炊きにして、おかずは目玉焼きに炒めたベーコンとピーマンを添える。

お弁当は、食パンにハムとポテトサラダを挟んだサンドイッチにした。

自慢をするわけじゃないが、料理は結構得意な方だ・・・てか、

成り行き上得意になったというのが正解かな。

家の親父は、ちょこつと程度だけ名の知れた画家で海外を飛び回って、ほとんど家には帰って来ない。

お袋は元々体が弱かったせいで、妹を生んだ後しばらくして死んでしまったらしい。

てなわけで、この家には俺こと御堂拓也みどうたくやと双子の妹である御堂夏香みどうなつかと御堂冬香みどうふゆかの三人だけって事だ。

現在、俺は高校二年生で、双子の妹たちは中学三年生だ。

俺が高校に入るまでは家政婦のおばちゃんを一人雇っていたんだが、俺が高校に入學すると親父は家政婦を雇わなくなった。

そして親父は、家政婦の代わりとして俺に妹の面倒をみると言うてきた。

俺はそれを快く承諾した。

それは何故かって・・・？

なんせ俺は・・・めっちゃ妹が好きだからだ！

必ずや、二人の妹を俺の理想の妹に育ててみせる！

【Part・2】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じてもらえたら嬉しいです。

【Part・2】

俺は今、キッチンで朝飯の準備中だ。

早くしないと、夏香のやつが怒鳴って来そうだな……。

なんて事を考えていたら、早炊きに設定しておいた釜から、リズミカルな音があった。

「よし、炊けたな」

俺は釜を開けて、素早く御飯をほぐす。

そして、階段の下から上の部屋にいる夏香に向かって

「おーい、夏香、朝飯の支度が出来たぞ」

すると制服に着替え終えた夏香が、鞆を持ちながら三秒も経たずにドタドタと音を鳴らして階段を降りて来た。

「お前なあ、もう少し女の子らしく、おしとやかにだな……」

「あー、もううるさいなあー、急いでるんだからちよっと黙っててよー！」

と説教の途中で一括されてしまった。

これじゃあ、どっちが年上なんだかわからしねえ……。

「けどな、今に見てるよ！ 絶対に俺好みの妹にしてやる！」

と、夏香の前で声に出せるほど勇気がない俺は、心の中で叫んだ。夏香はテーブルに並べられた料理を「お前は男か！」と突っ込みを入れたくなるほど豪快に口の中へ放り込んでいく。

そして、急いでいる割には飯を三杯もおかわりしてやがる。

夏香は確かによく食べるが、だからといって決して太っているわけじゃない。

逆にほどよく筋肉の付いた、スリムな体型をしている。

「お前さ、よくそんなに飯を食って太らねえな」

俺は夏香の姿を見つめながら、何気に聞いてみた。

「そんなの当たり前じゃない。あたしは毎日、部活でハードな練習をしてるんだから」

なるほど、それもそうか……。

夏香はバスケットボール部に入部している。

俺にとってバスケットボールというのは、お互いのコートにあるリングの中へボールを入れあう……そんな程度の知識しかない。

夏香がハードなっていうんだから、相当厳しい練習なんだろう。

「それじゃあ、行ってくるね。ちゃんと冬香を起こしてあげてよ」

いつの間に食べ終わったのか、食器を流し台に持って行き、俺の作ったサンドイッチの弁当を鞆に入れて玄関へと向かって行く。

「心配するな、ちゃんと起こすから大丈夫だよ」

夏香を見送るため、俺も玄関の前まで行って言葉を返した。

「お・こ・す、ただだからね。絶対、冬香に変な事しないでよ」

何なんだ？ この念の押しようは？ 俺ってそんなに信用ねえのかよ。

「分かってるって、大丈夫、俺を信用しろ」

「何言ってるのよ、エロ兄貴だから信用出来ないんじゃない」

夏香はそう言うと、大きな溜息をつきやがった。

それにしても夏香のやつ、兄に向かってエロ兄貴エロ兄貴って何ちゅう妹だ！

「俺はお前から見て、そんなにエロエロしてんのかよ！？」

と、勇気のない俺は必死に心の中で叫んだ。

「何よ、何か言いたい事でもあるの？」

夏香は、俺のもの言いたげな表情から何かを読み取ったのか、少し怒り口調といった感じがした。

「な、何でもないよ。それより、早く行かなくていいのか？ 朝練に遅刻するぞ」

俺がそう言うと、夏香は腕時計を見て目を丸くする。

「あつ、やっばい！ 急がなきゃ！ それじゃあ、行ってくるね！」

夏香は急いで玄関を出ると、走って学校へ向かった。

「ああ、早く急げよ」

俺は、一つ大きな溜息をついた後、冬香を起こすために二階へと歩みを進めた。

【Part 3】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じてもらえたら嬉しいです。

【Part 3】

俺は二階へ上がると、冬香の部屋の前で……ていつか夏香と冬香は同じ部屋だから、厳密に言うと夏香の部屋でもあるのだが……。

ちなみに、俺は当然一人部屋ね。

「おーい、冬香、入るぞー」

部屋の扉を叩いたあと、礼儀正しく声をかけてから中へと入った。部屋の中は、まあ……可愛いぬいぐるみ等が置かれていて女の子の部屋ですってな感じだ。

本やら何やらもきちんと並べられ、ゴミ一つ落ちてなくとても綺麗な部屋だ。

これは冬香がやったんだろうな……。
がさつな夏香だけだったら、きっと足の踏み場もない状態になってた事だろう。

夏香と冬香は二段ベットを使っていて、冬香は下の段でまだ寝ている。
俺はベットの傍まで行き、冬香の寝顔を覗き込む。

「うーん、こうして見ると、眠れる森の美女って童話に出てくる永遠の眠りにつくお姫様って感じだな」

自慢をするわけじゃないが、夏香と冬香はめっちゃ可愛い。

これは自分の妹だから過大評価してるわけじゃないぜ。

夏香はショートヘアで、体を動かす事が大好きな活発なスポーツ

万能美少女。

冬香は髪が腰のあたりまであるストレートのロングヘアで、運動は苦手な大人しい性格、そして頭が良く読書が大好きな知的美少女。まあ、夏香の頭は冬香とは違い、俺と同レベルでありあまり良くないって感じなんだけど。

それにしても、双子のくせしてここまで性格が違うとはねえ。冬香の口元からは、スー、スー、という寝息が聞こえてくる。

「何とも、気持ち良さそうに眠ってるなあ」

暫く、黙って冬香の寝顔を見つめる。

え？ 早く起こさなくていいのかって？

何を言ってるやがる、冬香を起こすのは三十分も後だ。

それまで、こつやつて静かにじーつと冬香の寝顔を眺めてるってなわけよ。

こんな所を夏香に見られたら、思いつきり罵倒されたあげく確実に何十発ものパンチをくらうな。

そんな恐ろしい光景を思い描いて、少し体が身震いした。

これは絶対、夏香にバレないようにしないと。

俺にとって、この至福の一時を壊されてたまるか！

「それにしても冬香のやつ、本当に気持ち良さそうに眠ってるなあ。眠れる森のお姫様が・・・」

冬香は低血圧のせいか、朝は何度声をかけても、なかなか起きてくれないんだよなあ。

何か簡単に、すぐ起きてくれる方法でもあれば・・・。

ん？ まてよ・・・確か森の中で眠り続けるお姫様は、王子様の口づけで目を覚ますんだよな？ てことは・・・。

もしかして、俺の口づけで冬香は目を覚ます・・・なんて事は・・・

。

「いや、ありえる！ これは何という妙案！ 俺ってやつは、何て頭が良いんだ！」

何だか自分に酔いしれて、涙が出てきた。さてさて、これは早速実行に移さねば！ 冬香を起こす時間まで・・・あと十分か。や、やばい・・・。

な、何だか物凄く緊張してきた・・・。

ま、まさか、この至福の時間が裏目に出るとは！

くゝ、長い！ 時間の流れがめっちゃ長い！

早く！ 時間よ早く流れてくれ！

【Part・4】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じてもらえたら嬉しいです。

【Part 4】

俺の目の前では、妹の冬香が静かな寝息を立てながら気持ち良さそうに眠っている。

部屋に置いてある時計に目をやると、とうとう冬香を起こさなきゃならない時間になった。

そして、俺は冬香を・・・いや、眠れる森のお姫様を目覚めさせるため、お姫様にく、口づけを・・・。

だー、めっちゃ緊張する！ たかがキスくらいで何でこんなに緊張してんだ俺は！

って、よく考えたら・・・これって俺のファーストキスじゃない、妹とファーストキス・・・。

んー！ 生きてて良かったー！ 今まで生きて来た中で、これほど最高の瞬間があっただろうか！？ 否！ まったく無かった！ 本当に無かった・・・。

い、いかん・・・あ、あまりの嬉しさに、な、涙が・・・うつ・・・。

さ、さて、気を取り直して・・・。
じゃ、じゃあ、い、いくぞー！

俺はガチガチの緊張状態のまま、ぎこちないがゆっくりと冬香の顔に自分の顔を近づける。

冬香を間近で見ると、「何ちゆう、可愛い寝顔をしてやがる！ こいつは！」と、声に出そうになったが、それを必死に堪える。

今、冬香が起きてしまったら、妹との初キスが無くなる！ それを避けねば！

俺はゆっくりと、慎重に少しずつ顔を近づけていく。

冬香の寝息が俺の顔に当たり、さらに緊張感が高まった。

も、もうちよい・・・もうちょっとで・・・ふ、冬香と・・・キ、キスを・・・。

あ、あと少し・・・あと・・・。

キスが出来ると思った次の瞬間、冬香の目がパツチリと開き、俺と冬香の目と目が合った。

ぎゃ〜！ めっちゃマズイ！ どうすんだコレ！？ この状況！俺が一瞬、アレコレと頭の中で迷っていると

「兄さん・・・顔が近い・・・」

と、何を考えているのか全く読み取ることが出来ない、感情の無い口調で冬香が言った。

「あつ、ご、ごめん！ いやっ、たった今、こ、声をかけて、ふ、冬香を起こそうと思ってさ」「

俺は急いで冬香から遠退き、心の動揺を隠せないまま何とかこの状況を回避しようとしたのだが・・・。

「嘘・・・今、わたしにキスをしようとした・・・」

ドキッ！

うっわっ！ 完全にやろうとした事がバレてる！ もう最悪じゃねえか！

「バ、バカだなあ、そ、そんな事、こ、この俺が可愛い妹にするわけないだろ。

あははっ・・・」

ダ、ダメだ。

冬香の目は完全に俺の事を疑ってる目だ。

「ご、ごめんなさい・・・確かに俺は、冬香にキスをしようとした・・・」

流石にこれ以上、冬香に何を言っても無駄だと観念した俺は、素直に謝った。

「兄さんの・・・変態・・・」

冬香はそう言つと、いつも通りの表情に戻った。

瞳は、相変わらず眠そうなままだが・・・。

それにしても、夏香にはエロ兄貴と言われ、冬香には変態と言われる・・・一体、俺ってどんな風に妹たちから見られてるんだよ・・・。

俺は、大きく溜息をついた。

「兄さん・・・どうしたの・・・?」

うな垂れてる俺の姿を見て、冬香は心配になったのだろう。

冬香はやさしい妹だな・・・と思いつつ、俺はもう一度大きく溜息をついた。

「いや、何でもないよ。朝飯、もう出来てるから、着替え終わったら下に降りて来いよ」

「うん・・・」

俺は肩を落としたまま、静かに部屋を出て行った。

【Part・5】（前書き）

コメントをくださった方、返信が出来なくて申し訳ありません。

そして、急に短編から連載へと替えてしまい申し訳ありませんでしたm（-）m

話の内容が思っていた以上に長くなりそうだったので、連載の方に投稿するようにした次第です。

相変わらず下手な文章ですが、引き続きこの作品を読んで頂けると嬉しいです。

冬香を起こし・・・ていうか、冬香は自分で起きたんだけど、部屋を出た俺はもう一度リビングに戻った。

テーブルの上に用意しておいた、ラップで包んだおかずをレンジで温め直しながら、さっきの事を思い返していた。

はあ、あとちょっとで冬香とキスが出来たっていうのになあ・・・。

冬香のやつ、何ちゅうタイミングで目を覚ますんだよ。

だけど、何で今日に限って自分で目を覚ましたんだ？

まさか・・・途中から寝たふりをしていたとか？

うーん、まさかな・・・。

まあ、今更悩んでも仕方ないか・・・。

レンジで俺の分と冬香の分のおかずを温め直した後、暫くして冬香がラフな部屋着の姿でリビングへとやって来た。

「冬香、さっきはごめんな」

俺は冬香にもう一度、キスしそうになった事を謝った。

「うん・・・さっきの事はもういい・・・怒ってないから・・・」

冬香は、相変わらず感情が読み取れない淡々とした口調だったが、どうやらキスの事は許してくれたようだ。

「それから、さっきの事は・・・夏香には内緒にしてってくれるか？

あいつにバレたら、下手をすると俺・・・殺されかねないからな」

「うん・・・夏香には話さない・・・」

冬香には大袈裟に言ったつもりだったが、夏香のことだ・・・実際のところ、俺の身は本当にヤバイような気がする・・・。

だけど、冬香は分かってくれたようだから、とりあえずは一安心かな。

「ありがとう、冬香。お詫びに、今度何かお礼をするからさ」

「うん・・・期待してる・・・」

「ああ、期待して待ってていいぞ」

それから、俺と冬香は朝飯を食べ終わり、食器を洗って片づけたあと各々の部屋へと戻った。

俺は部屋に戻ると制服に着替え、今日持って行く教材を鞆に放り込んで一息ついた。

さして、冬香にはどんなお詫びをしたらいいかなあ・・・などと考えていたら玄関のチャイムが鳴った。

「おっと、来たな」

俺は立ち上がり、部屋を出て玄関へ向かった。

そして、玄関の扉を開ける。

「拓也さん、おはようございます！」

と元気のいい挨拶で、冬香を迎えに来た如月秋穂（あきほ）ちゃんが頭をペコッと下げていた。

秋穂ちゃんは、夏香と冬香の共通の友達・・・ていうか、俺たち兄妹の幼馴染みで家のすぐ隣の家に住んでいる。

いつも左右の髪の毛を黄色いリボンで結んだ状態、ようするにツインテールにしている、それがよく似合う可愛くて元気一杯の女の子なんだ。

「秋穂ちゃん、おはよう。今日も元気一杯で凄く可愛いね」

「そんなんっ、何か照れちゃいます」

何だか、秋穂ちゃんの頬がほんのり赤くなったような気がする。

秋穂ちゃんの照れた姿も、何というか・・・か、可愛い。

「秋穂ちゃんのツインテール、よく似合ってるよ。うん、凄く可愛い。是非とも、俺の妹になって欲しいなあ・・・なんてね」

つつい調子に乗って、本音が口から出ちまった！

「もう、拓也さんたら、可愛い妹なら二人も居るじゃないですか」

あははっ、それもそうだ・・・と思いつつ。

「いや、俺にとって妹は何人いてもOKだからさ」

なんて言った瞬間、いつ来たのか真横に冬香が制服姿で立っている事に気が付いた。

「な、何だ冬香、もう降りて来てたのか？」

さっきの秋穂ちゃんとの会話をどこまで聞かれていたのか気にな

り、ちょっと冬香の表情を窺ってみる。

冬香の表情は、別に何の変化もなくいつも通りだった……ていうか、冬香はあまり感情を表に出さないから、何を考えているのか掴みづらい。

それでも、どこことなく少し怒っているような気もしなくもない。

まあ、俺の気のせいかもしれないけど……。

「おはよう……秋穂……」

「おっはよう！ 冬ちゃん！ 早くがっこへ行こっ！」

「それでは兄さん……行ってきます……」

「拓也さん、行ってきます！」

「あ、ああ、二人とも気を付けてな」

冬香と秋穂ちゃんは、二人仲良く学校へと向かう。

そんな二人を、俺は軽く手を振って見送った。

そして二人を見送ったあと、俺は自分の部屋へと戻った。

部屋に戻ってから十分位たって、また玄関のチャイムが鳴った。

「よし、それじゃあ行ってくるか」

俺は机の上に置いた鞆を持って、玄関へと向かった。

そして、玄関の扉を開けると……。

「拓ちゃん、おはよう」

と、肩口まで伸びた髪を靡かせながら、如月春菜が屈託のない笑

顔で立っていた。

「おう、おはよう、春菜」

俺も春菜に、朝の挨拶を返す。

そして、春菜と一緒に学校へと向かう。

春菜は名字で分かる通り、秋穂ちゃんの姉であり、俺たち兄妹の幼馴染みで、しかも高校の同級生だ。

そして、秋穂ちゃんと同じく春菜も当然可愛い。

春菜の性格は、秋穂ちゃんと違いおっとりしてて……ていうかポケポケしてる感じだな。

そんなだから、一見アホっぽく見えるのに頭は良いんだよな、これが……。

うーん、全くの不思議だ。

「もう、拓ちゃん、またわたしの事バカにしてたでしょ？」

春菜は、俺の表情を見て何かを感じ取ったようだ。

意外に鋭い！

「な、何言ってるんだよ。俺は、今日も春菜が可愛いなあと思ってただけだよ」

「え？ そうなの？」

春菜は、きよとんとした顔をしている。

「嘘じゃねえよ。本当に思った事だぞ」

「そ、そうなんだ……。何か、嬉しいな」

春菜の顔が、みるみる赤くなってゆく。

そんな春菜を見ていた俺も、自分の言った事に対して何だか凄く
恥ずかしくなってきた。

「春菜、ゆっくり歩いているとバスに乗り遅れるぞ。さっさと急い
うぜ」

「あっ……、うん」

そして、俺と春菜はいつもと違う雰囲気のまま、バス停へと急い
で向かった。

【Part・6】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺と春菜はバスに乗って学校へと向かった。

バスの中は、通勤と通学のやつらで満員御礼となっていた。

この窮屈な状態は、いつまで経っても慣れないが、学校までは十分程度で到着するのでそれまでの我慢といったところだ。

俺のすぐ横にいる春菜を見ると、何だか少し息苦しそうな表情をしていた。

そりゃそうだろう、こんだけ詰め込めば身動き一つ取れやしないし、俺だって息苦しくて仕方ない。

そう思っていると、満員状態にも関わらずバスはバス停に停まり、また人に乗せようとしていやがる。

マジかよ！ あの運転手、ふざけてやがる！ 空気読めよ！
窮屈な状態が、さらに窮屈で過酷な状態へと変わりやがった。

そして、いつの間にか俺と春菜はお互いが向き合うような状態になっっていた。

な、何、これ？ めっちゃ緊張するんですけど！

春菜はというと、鞆を両手で胸のあたりで抱き抱えた状態で顔を赤くし、俺と視線を合わせないようにしているのか、ずっと俯いている。

まあ顔が赤いのは、この満員御礼の人の熱気で熱いのか、それとも別な理由かは分からないが……。

「春菜、平気か？」

俺は、春菜の事が少し心配になったので、ちよつと聞いてみた。

「うん、平気だよ……。だって……、拓ちゃんが傍にいるんだ

もん」

そう言って、春菜は俯いたまま、さらに顔を赤くしていた。

「あ、そ、そつか。それなら、いいんだ」

俺は一瞬、頭が真っ白になり何を言ったらいいのか分からず、思わずそっけない答えになってしまった。

春菜のやつ、こんな所でまた何ちゅう恥ずかしいことを！

だ、だが……。

い、いかん、何だか無償に春菜を抱きしめたくなってきた。

この激しく締め付けられた状態の中で、俺っていうやつは何て不謹慎な！

こ、ここは、何とか抑えねば！

……って、ちょっと待てよ。

この満員状態なら、春菜を抱きしめても自然なのでは……？

い、いや、しかし……。

だ、だからといって……。

う〜ん、ああ！ もう！ 頭の中で考えていても、無限ループ状態じゃねえか！

男だつたら、やる時にはやるってやつだよな！ そうだよ、そうなんだよ！

うん！ そうに違いない！ てなわけで、早速春菜を抱きしめ！
……たと思つたら、春菜じゃなくて変なおやじを抱きしめちゃつた！

「拓ちゃん、拓ちゃんどうしたの？ 早くバスを降りないと扉が締まっちゃうよ」

と、いつの間にかバスは目的地に着いており、先に降りていた春

菜が、外から声をかけていた。

俺は、春菜の声によって我に返り大声で叫んだ。

「あ、ああ！ 降ります！ 降りまゝす！」

バスを無事に降りられた俺は、そこで大きな溜息を一つついた。

「拓ちゃん、どうしたの？ 気分でも悪いの？」

と、俺の元気のない姿を見て心配した春菜が声をかけてくれた。

まあ、確かに春菜と間違えて、変なおやじを抱きしめちまったから気分は悪いけど……。

でも、そんなこと春菜には絶対言えねえ！

「い、いや、心配ないよ。多分、俺にとって今日一番最悪の不幸っただけだから……」

「……う、うん」

そう言った俺の言葉に納得できたのかどうかは分からないが、春菜は素直に頷いていた。

それから俺たちは、かっこの県立府津雨乃高等学校と書かれた門をくぐり教室へと向かった。

俺と春菜が教室に入ると……で、言っておくが俺と春菜は同じ教室の二年B組だ。

俺は窓際が一番後ろの席に向かい、春菜は真ん中の前から二番目の席へと向かった。

「拓也、おはよう。今日も春菜ちゃんと一緒に登校なんて、ほんと羨ましいよね」

俺が自分の席に着くと、俺の目の前に座っていた神崎清彦がこつちを向いて声をかけてきた。

清彦は真面目で優しく、嘘が下手な、頭は俺と同じくあまり良くないが、俺にとっては小学校からの付き合いで心を許せる親友の一人だ。

「まあ、俺と春菜は生まれた時から家が隣同士の幼馴染みだからな」

「いいなあ、幼馴染み。僕にも、そんな女の子がいたらなあ・・・」

「そうか？ 俺としては、幼馴染みよりも妹の方がいいけどな」

俺がそう言うと、清彦は飽きれ顔で

「ほんとに拓也は、妹が好きだよな。それ、ちょっと異常だよ」

「うるせい、異常言うな。これが俺の普通なんだから、仕方ねえだろ」

「はいはい、分かったから、そんなに怒らないでよ」

「ていうかよ、そもそも俺が妹好きになったのは、清彦のせいじゃねえか」

「え？ 何で？」

清彦のやつ、きょとんとした顔をしてやがる。

まったく、マジで分かってねえのかよ。

「忘れてるなら、教えてやるよ。俺らが小学六年の時、お前が妹もののギャルゲーを

絶対に面白いから俺にやってみろって、熱く語って勧めたんじゃねえか」

「ああ、そういえば、そんな事もあったね。でもさ、何でそれが拓也の妹好きに

なった事と関係があるのさ？」

「まだ、分からねえのかよ。その、そのゲームが原因で妹好きになっちまったんだよ」

「ええ！？ な、何で！？ あれは、ただのゲームだよ？」

清彦のやつ、めっちゃ驚いてやがるな。

「ああ、そんな事は分かってるさ。けどな、俺にとっては衝撃的なゲームだったんだよ。俺の妹に対する価値観を変えてしまう程にな」

「ふん．．．あのゲームって、そんなに凄いゲームだったかな．．．？」

確か、あのゲームは四人の妹を自分好みの妹にしていくって内容だったよね？

ええと、確か．．．タイトルは．．．うん．．．何て言ったかなあ．．．」

清彦のやつが、なかなか思い出さないから、俺が代わりに言うてる事にした。

「そのゲームのタイトルは、『俺による、俺のための妹育成計画！』だよ」

「ああ！ それそれ！ それだあ！」

「どうだ、思い出したか？」

「うんうん、思い出した思い出した。へへ、あのゲームって、拓也にとってはそんなに凄いゲームだったんだね。全然、知らなかったよ」

そりゃそうだろうな、この事は誰にも言っていなかったし。

と、そんなこんなで清彦と話をしていたら、担任が教室へ入って来た。

そして、今日も一日、まったく楽しくもない勉学の時間が始まった。

【Part 7】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

今は、四時限目の数学の授業中だ。

俺にとって、この数学の授業が一番退屈……ていうか一番苦痛な時間だ。

そんな事もあって、俺はボツと窓の外を眺めながら、授業とは全く関係のない事を考えていた。

今日の朝、清彦と話をしていたあのゲーム……俺が妹好きになるキツカケとなった。俺による、俺のための妹育成計画！』の事だ。小学六年の、このゲームをプレイする前の俺は、特別妹に対して執着があつたわけじゃない。

その頃の俺は、妹に対してごく一般的な感情しか持つておらず、妹たちが小さかった時は俺によく懐いていたから、それが凄く可愛かったり、逆にそれがうざいと思つた時があつたり……と、そんな感じだつた。

そして、小学六年の夏の日、学校は夏休み中で暇を持て余していた俺は清彦を家に呼んだ。

清彦は、その当時からパソコンのギャルゲーにハマっていたから、何か面白いゲームがあつたら、それを持って来いよつて言つたら、あのゲームを持って来たというわけだ。

俺は初め、『俺による、俺のための妹育成計画！』というゲームタイトルを見て、何だよこのゲームは！？……と思つた。

そりゃそうだろう、俺にはリアルな妹が二人もいるんだからな。それを何でわざわざ、ゲームの世界にまで妹の面倒をみなけりやいけねえんだよ……と清彦に言つて、俺はゲームをプレイする気ゼロだつた。

その日は結局、清彦が持つて来た別のギャルゲーをやつて二人で

遊んだ。

そして、清彦は帰る間際になって、あのゲーム『俺による、俺のための妹育成計画！』をどうしても一度プレイしてみても・・・と熱く語って置いて行きやがったんだ。

それでその日の夜、晩飯を食べ終わった俺は、自分の部屋に戻ってパソコンの電源を入れ、清彦に騙されたと思って『俺による、俺のための妹育成計画！』のディスクをドライブに入れた。

インストール作業が十分程度で終わり、早速ゲームを立ち上げてみる。

画面全体にはそれぞれ年齢が違うであろう女の子が四人並んでいて、中央よりちよい下あたりにタイトル、そしてその下にスタート/コンティニュー/ギャラリー/オプションと横一列に並んだ文字が表示されていた。

そして、俺はマウスを動かしてスタートの文字をクリックして、ゲームを開始した。

ゲームの内容を簡単に説明すると、タイトルに育成とは付いていても別にシミュレーション的な要素が入っているわけでもなく、それぞれの妹たちにもパラメータと呼ばれるものも付いてはいない。

普通のアドベンチャーゲームと同じく、コマンド選択方式となっていて、そのコマンドの選択・・・ていうか、ゲームの主人公である兄が妹たち取る行動によって、その妹たちの性格や兄に対する想い、そしてストーリーが変化していく。

兄妹とはいっても血の繋がった兄妹じゃなく、主人公の父親の再婚相手に四人の娘がいたという設定だ。

主人公である兄は高二の十七歳、そして四人の姉妹はそれぞれ上から高一で十六歳の長女、中二で十四歳の次女、中一で十三歳の三女、小五で十一歳の四女といった感じだ。

そんな年頃の男女がいきなり兄妹となつて一つ屋根のしたで一緒に暮らすのだから、ギクシャクするのは当然だ。

そこで、そんな状態を改善すべく主人公である兄が、四人の妹と

仲良くなるために計画を練り、実行に移していく……。

そして、いつしか主人公は仲良くなるだけでは満足出来ず、その行動は徐々にエスカレートしていき、今度は自分の思い描いた理想の妹にしようと計画を練り、それを実行に移していった……。

まあ、こんな感じのゲームだったんだが……。

俺はこのゲームをプレイしていて、プレイすればする程夢中になっ
ていった。

そして、このゲームを完全クリアした時に気付いちまった……
俺の思い描いた理想の妹像ってやつを……。

それからだったな、妹に対する俺自身の想いが変化したのは……。

ゲームの世界ではなく、リアルな世界の妹……夏香と冬香をと
ても愛しいと感じるようになったのは……。

「……が鳴ったよ。ねえ、拓也聞いてる？ 拓也？ 僕の声、聞
こえてないの？」

「あ、わりいわりい、ちょっと考え事してたからさ」

俺は清彦の声で我に返り、声をかけられるまで気が付かなかった
が、いつの間にか数学の授業が終わってやがった。

「授業中に考え事を？ 拓也、何か悩んでる事でもあるの？」

「いや、そういうんじゃないよ……ん、まあ、その事はい
から早く弁当を食おうぜ」

「え？ あ、うん……」

清彦は何だか納得出来ないといった様子だったが、そんな事は気

にせず、俺は自分で作ったサンドイッチの弁当を机の上に出して食べ始めた。

【Part 8】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は今、学校で昼飯の弁当を食べている最中だ。

ちなみに、今は授業中ではなく、早弁をしてるわけでもないぞ。
ちゃんとした昼休みだ。

「そう言えばさ、前から拓也に聞こうと思っていたんだけど・・・」

「ん？ 突然何だよ？」

清彦も弁当を机の上に出して、昼飯を食べ始めた。

「さつきも拓也自身が言ってたけど、拓也は妹が好きなんだよね？」

「ああ、そうだけど。それがどうしたんだ？」

「それじゃあさ、幼馴染みの春菜ちゃんの事はどう思ってるの？」

「え！？ は、春菜のこと！？」

「うん」

清彦のやつ、急にどうしたんだ？

春菜の事をどう思ってるかだつて？ そんな事、俺だつて考えた
ことねえよ！

「きゅ、急に、何で春菜の事なんか聞くんだよ」

「え？ だつてさ、拓也と春菜ちゃんって、周りから見ると付き合ってるみたいに仲が良いからね。それで、拓也は春菜ちゃんの事が好きなのかなあって……」

「ば、ばかつ、俺と春菜はそこまで仲良くねえよっ」

「え？ そうなの？」

「そ、そっだよっ」

「ふうん……。拓也は素直じゃないね。だけどまあ、今はそういう事にしておこうかな」

「な、何だよそれ。お、俺は別に春菜の事なんか……」

な、何とも思ってたねえからな。
って、清彦に言おうとしたら……。

「なににないに……。？ 拓ちゃん、わたしがどうかしたの？」

春菜は、校内にある売店で買ったと思われるパンを両手で抱えて、俺のすぐ隣に立っていた。

「え？ 春菜どうしたの？」

うわっ、春菜の後ろから佐伯優子（さへきゆうし）も来やがった！

佐伯優子は、春菜の中学からの親友で頭は良く、運動神経も良い。容姿は、身長が169cmと女の子にしては背が高い方で、体型

はどちらかというと細身の方だ。

顔は、ちよつと大人びた感じの美人顔で良い方なのだが、俺的には可愛い感じの春菜の方が好みだ。

ちなみに春菜はというと、身長が162cmで体型はほんの気持ち程度のポツチャリ系といった感じだ。

そして、次いでだから言っておくが、俺は身長175cmで太つてもいないし痩せてもいないといった中途半端な体型なのと、顔は普通よりちよつと良くいらいつてな程度だ。

清彦は、身長が167cmで痩せ型、顔はカッコイイ・・・というより、俺的にはカワイイといった感じに見えるな。

「気のせいかもしれないけど、拓ちゃんがわたしの事を話してるよ
うな気がしたから・・・」

「ちよつと御堂、あんたまた春菜の悪口を言ってたんじゃないでし
ようね？」

佐伯のやつが、いきなり身も蓋もない事を言い出しやがった！

「え？ 拓ちゃん、わたしの悪口を・・・言っていたの？」

まったく！ 佐伯のせいで春菜が誤解して、悲しそうな顔をして
るじゃねえか！

「ば、ばか！ ちげえよ！ この俺が春菜の悪口なんか言うわけね
えだろ！」

「それじゃあ、あんたは春菜の何を話していたのよ？」

「や、やあ、そ、それは・・・」

「ああ、それはね。拓也が春菜ちゃんの事をどう思ってる……むぐぐっ！」

俺は咄嗟に、清彦の口を手で塞いだ。

「いや、清彦のやつが俺と春菜はいつも仲が良いって言うもんだから、

それは俺と春菜が幼馴染みだから当然だろって話しをしてたのさ」

「そうだったの？ 拓ちゃん？」

「ああ、そうだぞ」

「なるんだ、そうなんだあ。良かった」

春菜のやつ、ホッとした表情をしてやがる。

何とか、春菜への誤解は解けたようだ。

「ふん、あたしはまだ半信半疑だけどね。でも、春菜が納得したなら、
良しとしてあげるわよ」

佐伯のやつ、いつかこの俺がギャフンと言わせてやる！

「もぐもぐもぐ！」

「ああ、清彦、わりいわりい」

俺は、清彦の口を塞いでいた手を離れた。

「もう、拓也酷いじゃないかあ。急に口を塞ぐから、苦しかったよ」

「ごめんごめん、この通り誤るからな」

俺は両手を合わせて、清彦を拝むような形で謝った。

「まあ、いいけどな」

とりあえず、清彦は許してくれたようだ。

「そっぴや、なあ春菜？」

「うん？　なあに拓ちゃん？」

「お前、今日弁当どうしたんだよ？」

春菜は、いつも自分で作った弁当を持って来ているはずなのに、今日は売店のパンを買って来ている事が気になった。

とはいえ、理由は大体予想がついてはいるのだが……。

「あ、えつと……。お弁当は、朝ちゃんと作ったんだけど……鞆に入れるのを忘れちゃって……そのまま家を出て来ちゃった」

「は、やっぱりな。今回で、弁当忘れて来たのって何回目だ？」

「え？　えつと……。ん……。何回くらいかなあ……。えつと……。うんと……」

春菜は、何度か小首を傾^{かし}げて考えていたが……。

「ごめんね、拓ちゃん、ちょっと分からないかも・・・」

はあ・・・。

まあ、俺が春菜に聞いたのが間違いだっとな。

「そうだな・・・。大体、週に二、三回は忘れて来てるって感じだぞ」

「そ、そんなに忘れて来てるのかなあ・・・？」

「ああ、そうだぞ。だから、明日からは、朝春菜が俺を迎えに来た時、俺が弁当を忘れてないか鞆の中をチェックしてやるからな」

「え？ う、うん、拓ちゃんありがとう。それじゃあ、明日からよろしくね」

「ああ、俺に任しとけ」

そして、春菜と佐伯は自分の席へと戻って行った。

佐伯が立ち去る間に、春菜の鞆の中は見てもいいけど、エッチな事はするなよ・・・って、捨て台詞を吐いて言った事に関しては聞き流したけどな。

「拓也って、本当に春菜ちゃんには甘いよね・・・というか、やさしいよね」

「うるせいな、春菜は俺の幼馴染みだから、このくらい当たり前なんだよ」

「はいはい、そうだね。そう言う事しておくよ」

これ以上、清彦に突っ込みを入れるとドツボにはまりそうだったので、俺は黙って弁当をたいたらげる事にした。

【Part・9】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・9】

午後の授業が終わり、今は放課後だ。

何らかの部活に入っているやつらは、そのまま学校に残り、入っていないやつらは帰宅する。

そして、俺はというと帰宅の部類ってなわけだ。

「拓ちゃん、また明日ね」

「ああ、部活がんばれよ」

「うん」

春菜はそう言って、軽く頷いてから教室を出て行った。

春菜は茶道部に入部している。

前に一度、春菜に何で茶道部なんかに入ったんだ？ って聞いた
ら、わたしお茶が大好きだから・・・て、楽しそうに笑顔で答えて
たな。

まあ、何だか春菜らしいなって思ったけどさ。

「御堂、明日の朝、春菜にエッチな事するなよ」

て、また佐伯のやつが捨て台詞を吐いて、教室を出て行きやがっ
た！

「するか！ ボケ！」

と言った俺の言葉が、佐伯の耳に届いたかどうかは分からないが、とりあえず否定しておいた。

佐伯はバレーボール部に入部していて、身長の高さと運動神経の良さで、バレー部の中ではかなりの期待を集めているらしい。

まあ、佐伯は二年生の中で唯一レギュラーに選ばれているらしいからな。

そりゃ、周りの期待も大きい事だろうよ。

「ねえ拓也、今日も来れないの？」

「ああ、わりいな。俺が帰らないと、冬香が一人寂しく家で待つてる事になっちまうからさ」

「いいよ、いいよ、気にしないで。それじゃあ拓也、また明日」

「おお、また明日なあ」

清彦は、鞆を持って教室を出て行った。

清彦のやつも部活・・・ていうか同好会なんだが、一応活動はしている。

なぜ同好会かというと、ただ単に人数が少ないために部として生徒会に認可されていないって事だ。

そして、部として認可されなければ生徒会から部費がもらえない。そんな同好会に、俺も幽霊会員として入っているのだが・・・。

現在、この同好会には三人の会員がいて、一人は副リーダーまえじまのりこの清彦、二人目は幽霊会員の俺、最後の一人は前島典子まえじまのりこっていう二年組こみの女の子で、この同好会を作った張本人及びリーダーだ。

前島とは高一の時同じクラスで、入学当初は俺の席の隣だったため、ちよくちよく話しをしているうちに仲良くなったというわけだ。まあ、どちらかと言えば俺よりも清彦の方が意気投合してたみ

ただいだけどさ。

前島は明るい性格で裏表がなく、いつも長い後ろ髪をリボンで結んだポニーテールが良く似合う可愛い女の子で申し分ないのだが、ただ一つ問題があるとすれば・・・趣味が根っからのギャルゲー好きってところだな。

その趣味が講じて、ゲーム研究同好会なんていうものを作ったってなわけさ。

ゲーム研究なんて名前は付いているが、結局のところやってる事と言えばギャルゲーをやって、その評価を言い合っただけの事だ。今は四月の下旬でもうすぐゴールデンウィークなのだが、各々がこぞって新入生の勧誘をしている。

前島や清彦も例外ではなく、同好会から部に格上げするべくゲーム研究同好会に入会してもらったため必死になって新入生を勧誘しているのだが・・・まだ、その努力は報われていないらしい。

「さ〜て、帰るか」

前島と清彦にすまねえな・・・と心の中でつぶやいた後、俺は鞆を持って教室を後にした。

学校を出た俺はバスに乗って家路につき、家に帰って来た。

玄関の扉を開けると、綺麗に揃えられた一足の靴が目に入った。

「冬香のやつ、いつも帰って来るのが早いな」

まあ、俺も早いけどさ。

リビングにいないって事は、いつものごとく部屋で好きな本でも読んでいるんだろう。

俺は二階へ上がると、冬香の部屋の前で・・・。

「お〜い、冬香〜、ちょっと入るぞ〜」

と、声をかけてから扉を開けて部屋の中へと入った。
部屋の中には、予想してた通りに部屋着姿の冬香が勉強机の椅子に座って本を読んでいた。

「兄さん・・・お帰りなさい・・・」

「ただいまっ」

俺は冬香の傍まで行き、冬香が読んでいる本を覗き込んだ。

「今日は、どんな本を読んでるんだ？」

冬香は、本の表紙を俺に見せてくれた。

「なになに、『わたしの初恋は、お兄ちゃん』・・・。な、なか
なか面白そうなお本じゃないか」

「うん・・・面白い・・・」

「そ、そっか、それは良かったな」

まさか、冬香がこんな本を読んでいるなんてな。

『わたしの初恋は、お兄ちゃん』・・・。

なんて本を読んでいるという事は・・・。

もしかして、冬香のやつ俺が初恋の相手・・・なんて事は・・・。
いやいや、たまたま面白そうだから買って読んで・・・という
可能性も。

うん・・・。

まあ、早急に答えを出す必要もないか・・・。

とりあえず、この件は保留だな。

「兄さん・・・何か用？」

「え？ ああ、帰宅の途中でコンビニ寄ってケーキを買って来たから、あとで下に降りて来いよ。二人で一緒に食べようぜ」

「うん・・・わかった・・・」

冬香の返事を聞いたあと、俺は冬香の部屋を出て行った。

【Part・10】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

冬香の部屋を出た俺は一旦自分の部屋に戻り、そこで学校の制服からトレーナーに着替えてリビングへと向かった。

それからキッチンでお湯を沸かし、急須にお茶の葉を入れて飲み物の準備をする。

お茶の葉は、お茶好きの春菜がいつも持って来てくれるので茶葉を買う必要がないのはとても助かるし、お茶通の春菜だけあって、複数の茶葉をブレンドした春菜オリジナルのお茶は絶妙な渋みと旨さがあつて、俺たち兄妹にはとても好評だ。

お湯が沸いたあと急須に注いで三分ほど待つてから湯飲みに入れる。

コンビニで買ったイチゴのショートケーキを冷蔵庫から出し、フオークと一緒に皿に乗せてテーブルに置いた。

それから一分ほど経つて、冬香がリビングへとやって来た。

「冬香、お茶とケーキはもう準備してあるから、早速食べちまおうぜ」

「うん・・・」

冬香はそう言って頷くと椅子に座つて、フオークを手に取りケーキを食べ始めた。

俺も一緒にケーキを食べ始める。

そして、冬香がケーキを半分ほど食べ終えたところで、俺は冬香に話し掛ける。

「なあ冬香、新しいクラスにはもう慣れたのか？」

「うん……」

「友達はどうか？ 仲の良い友達は出来たのか？」

「秋穂がいる……」

「ああ、秋穂ちゃんか……て、秋穂ちゃんは友達の前に幼馴染みじゃねえか」

「うん……そうだけど……」

「いや、そうだけどって……」

「まあ、秋穂ちゃんは、確かに仲の良い友達なんだろうけど……」

「冬香、秋穂ちゃん以外に仲の良い友達はいないのか？」

「いない……」

「ああ、そうですか……て、いねえのかよ！」

「そ、そうか、まあ冬香がいないっていうなら仕方ないよな」

「とりあえず、秋穂ちゃんが一緒にいてくれれば心配する事はないと思うが……」

「秋穂ちゃんとは、ずっと同じクラスだったよな？」

「うん……」

「そうか、それならいいんだ」

秋穂ちゃん、冬香の事・・・お願いします！

「ねえ兄さん・・・ケーキ食べ終わった・・・」

「あ、そ、そうか」

冬香の前に置かれた皿には、綺麗にケーキが無くなっていた。

「もう・・・部屋に戻っていい？」

「お、おう、いいぞ。食器は俺が片付けておくから」

「うん・・・わかった・・・」

冬香は、自分の部屋へ戻って行った。

多分、読みかけの本の続きが気になっていたんだろう。

俺は、自分と冬香の食器を片付けたあと部屋に戻った。

そして部屋に戻った俺は、勉強机の椅子に座り『俺による、俺のための妹育成計画！』と表紙に書かれた一冊のノートを広げた。

「さうて、いよいよ計画を練る時が来たな・・・」

この真っ白なノートに、妹を育成するための計画案を書いていくわけなんだが・・・。

「まずは、第一段階・・・妹たちの俺への呼び方だな」

普通、妹が兄への呼び方として「お兄ちゃん」って言うのがデフォじゃないかと思うんだが……。

俺の妹たちに限っては、夏香は「兄貴」で冬香は「兄さん」って呼び方だ。

俺の理想の呼ばれ方は、一般的な「お兄ちゃん」なんだよ。

何とか二人の妹……夏香と冬香には、「お兄ちゃん」って呼ばせたい！

つつわけでだ、「お兄ちゃん」と呼ばせるにはどうしたらいいのか？……て事だ。

今更、二人に「お兄ちゃん」って呼んでくれって言ってもダメだろうな。

特に夏香のやつに、そんな事を言った日には「キモッ！」って言われて終わりだな。

「どうすつかなあ……。何か良い手はないか……」

物や金で釣るって手もあるが……。それじゃあ一時凌ぎだろうからな。

ごく自然に、永久的に言ってもらえないと困るしな……。

「だ~~~~！ 良い案が浮かばねえ！」

てか、そもそも何で呼び方から考えなきゃならねえんだよ！
くっそ〜！

俺はこのあと、1時間ほどアレコレと考えていたが良い案が思いつかず、結局考えるのに疲れてベットに横になった。

そして、寝てる間に何か思いつくだろ……。と、何の根拠もないままに目を閉じた。

【Part・i1】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・11】

「・・・起きて・・・」

え？ 何だ？ 誰かの声がしたような・・・？

「・・・さん・・・起きて・・・」

うん？ この声は・・・冬香の声？

「兄さん・・・起きて・・・」

な、何だ？ 一体どうしたんだ？ 俺はゆっくりと、ほんのちよつとだけまぶた瞼を開けてみた。

すると、何と！ 冬香の顔が目の前にあつた！？

な、何だ！ 何がどうした！？ てか、同じような状況が今朝もあつたような・・・？ て、ああ思い出した！

そついや、確かあの時は寝ぼけて夏香にキスをしようとして殴られたんだよな・・・まったく酷い目にあつたぜ。

で、今度は冬香が俺を起こしに・・・て、うん？ 何で冬香が・・・？

「兄さん・・・起きて・・・」

冬香が「起きて」と声をかけながら、俺の体を揺すっている。

うん、これはどうしたものか？ このまま普通に起きてもいいのだが・・・。

いやいや、ちょっと待てよ。

この状況をうまく利用して寝ぼけた振りを装い、夏香の時と同じように今度は冬香にキスをするという手も……。
いや、しかし……。

「兄さん……起きて……」

いやいや、ダメだダメだ。

冬香には今朝、すでにキスをしそうになって変態扱いされてるから、これ以上何かをしようものなら、軽蔑の眼差しを向けられるかもしれない……。

可愛い妹に嫌われるのは、俺の本位ではないしな。

まあ、とりあえずここは、素直に起きてあげるとするか。

俺は、ゆっくりと瞼を開いた。

「うん？ どうしたんだ冬香？」

「もうすぐ……夏香が帰って来る……」

「え？ ああ、もうそんな時間か……」

「お風呂を沸かしておかないと……夏香が怒るから……」

「ああ、そうだったな。すぐに風呂を沸かしておくよ。冬香、起こしてくれてサンキューな」

「うん……」

そう言って冬香は頷いたあと、俺の部屋を出て行った。

俺はベットから起き上がり、何気に勉強机の上に置かれた一冊の

ノートが目に入った。

「ああ、そう言えばアレを考えてる途中で、ベットに横になって眠っちまったんだな」

ん？ あれ？ あのノートが机の上にあつたという事は……。もしかして、……冬香に見られた？ てか、『俺による、俺のための妹育成計画！』が冬香にバレたんじゃ！？
い、いや、待て待て……幸か不幸か、ノートにはまだ何も書いていない。

見られたとしても、ノートの表紙に書いた『俺による、俺のための妹育成計画！』ってタイトルだけだ。

まあ、このタイトルだけでも十分怪しいのだが……。
とりあえず、冬香にはあとでそれとなく聞いてみるか……もし見たって言ったなら、うまく誤魔化しておこう。

「さて、まずは早く風呂を沸かしておかないとな。夏香が帰って来て風呂が沸いてなかったら、あいつ激怒するからな」

俺は自分の部屋を出たあとバスルームに行き、バスタブにお湯を張って風呂を沸かした。

そのあと、冬香の部屋へと向かった。

「おーい、冬香、ちょっと入るぞ」

俺はそう言って、部屋の中に入った。

部屋の中に入ると、相変わらず勉強机の椅子に座って本を読んでいる冬香の姿があつた。

俺は、ゆっくりとした足取りで冬香の傍まで近づく。

「な、なあ、冬香？ 読書の途中で悪いんだけど、ちょっと聞きたい事があつてさ……」

な、何だか、変に緊張するな……。

「聞きたい事つて……何？……」

冬香は、本に向けていた視線を俺の顔へ移す。

冬香の目を直視出来ない俺は、適当な所を見て視線を泳がした。

「ああ、えつとな……。冬香、さつきさ……。俺の部屋に入った時……。何か見た？」

「え？……。何かつて、何？……」

「い、いや……。ほらっ、俺の部屋の勉強机の上にあつた……。ノートとかさ？」

「ノート？……。ノートは見てない……」

「あっ、そうなの？ 何だ、見てなかったのか？」

「うん……。見た方が良かった？……」

「いやいやいや、別に見なくていいんだ。見たって何も面白くない……」

てか、まだ何にも書いてないノートだからさっ

そうか、冬香は見てなかったんだな。

とりあえずは、ごまかす必要もなく一安心って感じた……。いや

く、良かった良かった。

「用はこれだけなんだ。読書中の所、悪かったな」

「別にいい・・・」

「それじゃあ、晩飯の時にまた呼びに来るから」

「うん・・・」

俺は心配事が徒労に終わり、ホッと胸を撫で下ろしながら部屋を後にした。

【Part・12】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

冬香の部屋を出た俺は自分の部屋に戻り、机の上に置きっぱなし状態だった『俺による、俺のための妹育成計画！』のノートを鍵付の引き出しの中へ入れた。

それから暫くして、玄関の扉が開く音がした。

「おっ、夏香が帰って来たな」

俺は部屋を出て、一階に降りた。

思っていた通り、玄関の所で夏香が疲れた顔をして靴を脱いでいるところだった。

「お帰り、夏香」

「ただいま、お風呂沸いてる？ 部活の練習で汗だくなんだもん」

「おお、もう沸かしてあるから、いつでも入れるぞ」

「ありがとう。それじゃあ、早速お風呂に入ろうっと」

「俺は晩飯の準備をしてるからな」

「うん、わかった」

そう言って、夏香は階段を上がって自分の部屋へと向かった。俺はキッチンに入り、晩飯の準備に取り掛かった。

それから一時間後、俺たち兄妹はリビングで晩飯を食べている最中だ。

家の中で飯を食べる時は、なるべくみんな一緒に食事をするように心掛けているから、食事時に何か用事で家にいないって以外はいつも三人一緒に食卓を囲んでいる。

まあ、これは俺からの提案で家族団欒って意味でそうしているのだが……。

実のところ本音を言ってしまえば、俺がただ単に妹たちと話しをしたいだけなんだがな。

「ねえ冬香、ちょっと聞いてよ。今朝の事なんだけど、朝は時間がないっていうのになかなか起きて来ない兄貴をわざわざ起こしに行ったら……。」

「起こしに行ったら……どうしたの?……。」

「いやいや、ちょっと待て! 夏香のやつ、いきなり何を!？」

「急にあたしを抱きしめて、キスをしようと迫って来たんだよ。」

「抱きしめて……キス?……。」

冬香が、何やら考え込んでるじゃんかよ!

だ~~~~! 夏香あああ! 冬香にそんな話しをしないでくれ~~~~!

「そう、キスだよキス。実の妹にキスを迫るって、兄貴って普通じゃないよね? 冬香もそう思うでしょ?。」

ま、まずい! お、俺のイメージがどんどん崩れていく~~~~!

「それはよくない……」

「そうでしょ、冬香からもエロ兄貴に何か言っちゃってよ」

「ここの！ 夏香のやつ、今朝の一件を冬香にばらすとは予想外だった……！」

「ねえ……兄さん……」

「は、はいっ！ な、何でしょうか!?!」

ふ、冬香！ 頼む！ 今朝の事は……冬香にもキスをしそうになった事は言わないでくれ……！

俺は正直、半分涙目になって冬香に無言で訴えかけていた。

「兄さんの……ド変態……」

「は、はいっ！ 確かに冬香のおっしゃる通りです！ 俺はド変態やろっつです!」

「今度、夏香に……同じ事したら……」

な、何か、滅多に感情を表に出さない冬香が凄く怒っているような気がする!?!

「わたしは……兄さんを許さない……」

「わ、わかりました！ もう二度と夏香にキスを迫ったりしません!」

「うん・・・」

「え？ 冬香もう終わりなの？ もう少しエロ兄貴にお灸を据えて欲しかったんだけど・・・」

夏香は、何だかご不満といった感じた。

俺はというと、冬香にキスをしそうになった一件を冬香は夏香に黙っていてくれたのでホッとしていた。

「まあまあ、とりあえずこの一件は終了して、今は飯の時間なんだから美味しく食べようぜ」

「そ、そうだけど・・・まあ、別にいいけどね」

夏香は、まだ納得が出来ないといった感じではあったが、とりあえずは食欲を満たす事に専念する事にしたようだ。

その後、夏香と冬香は学校での話で何やら盛り上がっていたようだった。

俺はというと、下手に夏香や冬香に話を振って、またさっきの危険な話題がぶり返さないようにと一人で黙々と飯を平らげる事にした。

食事が終わると、夏香と冬香は食器を片付けて自分たちの部屋へと戻っていった。

そして、俺も食器を洗い終わったあと、自分の部屋へ戻りベットに寝転がった。

「ふう、何だか今日は色々と疲れたなあ・・・」

妹育成計画は、また明日にでも考えるところか。

清彦のやつに、少し相談してもいいしな。

「さうて、今日のところは風呂に入って、ギャルゲーやって寝るとするかな」

言うておくが、清彦ほどではないにしろ俺もギャルゲーは好きだ。棚の中には、俺のお気に入りにギャルゲーが数十本、所狭しと並べてある。

その中には、妹ものやら18禁ものやらも当然のごとく入っている。

そんな事もあってか、夏香のやつにはエロ兄貴などと言われる始末で……。

冬香の方はというと、こちらは何だか少し興味があるようだったのだが、可愛い妹が変に毒されても困るのでゲームはさせていない。まあ、ギャルゲーが好きとはいっても二次元キャラしか興味が無いなんて事はないぞ。

しっかり、三次元の妹も好きだ。

何とか二人の妹……夏香と冬香には、俺の理想の妹になって欲しいのだが、どうやら道のりは険しそうだな……。

などと考えつつ、それから俺は風呂に入ったあとギャルゲ-を満喫し、ベットに横になって眠りについた。

【Part・12】（後書き）

次話からの投稿は、作者の都合により申し訳ありませんが不定期とさせて頂きます。

【Part・13】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺はギャルゲーを満喫し、気持ち良くベッドの上で眠りについたら、はずだったのだが、何故か突然夜中に目が覚めてしまった。

「えっと、今は何時だ？」

ベッドの近くに置いてあった目覚まし時計を手に取って見てみる。

「うわっ、もう少しで三時かよ！ めっちゃ中途半端じゃねえか！」

一度目が覚めてしまうと、なかなか寝付く事が出来ないからなあ……。
こうなったら、朝まで起きてるしかないか。

俺はベッドから起き上がり、Tシャツとパンツ姿のままでも飲もうとキッチンへと向かった。

一階に降りてリビングに入ると、何故かそこには人形のように静かに佇み、どこか切なく憂いを帯びた冬香の姿があった。

そして、カーテンの隙間から照らされた月の光が、冬香をやさしく包み込んでいるように思えた。

冬香は、この俺が着ても余裕がありそうな大きな白のTシャツを着ているのみで、下には何も履いていない……。っていつても、ダボダボのTシャツを着てるからTシャツで膝上まで足が隠れていて分らないが、それでもパンツくらいはちゃんと履いてると思うぞ。

そんな冬香は月の光のせいなのか、ほっそりとした手足の白い肌がより一層透き通るような白さを感じさせていた。

冬香は両手で涙を拭いながら、必死に俺へと言葉を投げかける。

な、な、な、何でそんな事を聞くんだった!? きゅ、急にどうしちゃまったんだ冬香!? . . . て、今思ったけど冷静になって考えたら、急にこんな状況ってありえんだろ? それに、冬香はあんなに感情を表に出したりしないしな . . . 。

つつわけでだ、結論からいうと . . . これは夢だ、間違いなく夢だ。

俺は自分の出した答えに確信を得るため、自分の頬を思いっきりつねってみた。

すると . . . まったく痛くない。

いくらつねっても、全然痛みを感じなかった。

ほらな、思った通りだぜ。

夢だとわかった俺は、ホッと息をついた。

そして、これが夢だとわかってしまえば何て事はない、俺の好き放題に行動が出来るって事だ。

夢とはいえ、こんなチャンスは二度とないかもしれない! この際だから、夢の中で妹育成計画を発動してやるぜ!

【Part・14】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

今は夜中・・・ていうか、あと一時間程で朝日が昇るんじゃないだろうかという時間に、家のリビングにて俺と冬香は向かい合い、そして俺にとつてとても大切に可愛い妹である冬香が、何故だか理由は分からんけど、両の目から大粒の涙を流して泣いている・・・といった状況だ。

これが俺の夢の中だと分かっているけど、やはり可愛い妹に泣かれるというのは気分がいいものではない。

よって、俺は冬香の両肩にそつと手を乗せ・・・。

「冬香、もう泣くな。俺にとって、冬香も夏香も二人とも大切な可愛い可愛い妹で、大好きな女の子なんだからさ。だから、これ以上冬香のそんな悲しい顔を俺に見せないでくれ。いつもの冬香の、可愛い冬香の笑顔を俺に見せてくれないかな？」

そつ言つた俺の言葉に、冬香は泣きながら静かに頷いた。

「兄さんは・・・わたしのこと・・・好き？」

美少女が目には涙を浮かべながら、上目遣いに「わたしのこと・・・好き？」と聞かれて、「いいえ、嫌いです」なんて選択肢があるわけがない！ しかも、これが妹から言われたとなれば・・・答えは一つしかなかろう！ てか、夢とはいえ何という美味しいシチュエーション！ 俺の夢最高！ 生きてて良かった！ ありがとう俺！ ととと、いつまでも感動に浸っている場合じゃない。

早く返事を言つてやらないと、冬香がまた泣き出しそつだ。

俺は冬香の肩に両手を乗せたまま、涙で潤んだ冬香の瞳を見つめる。

そして……。

「冬香、好きだよ。俺は冬香のこと、とってもとっても好きだよ。俺にとつて冬香は最高の妹であり、最高の女の子だよ」

「本当に……わたしのこと……好き？」

「本当だよ。俺が可愛い妹に嘘なんてつくはずがないだろう？」

「うん……嬉しい……」

冬香はそう言つて、微笑んだ。

こんな冬香の笑顔、久しぶりに見たような気がする。

まあ、何にせよ、冬香が笑顔になってくれて良かった。

さてと、冬香の機嫌も良くなった事だし、それじゃあ早速妹育成計画の第一段階である、妹に「お兄ちゃん」と呼んでもらうつを実行に……。

「ねえ、兄さん?……」

「うん? どうした、冬香?」

「あつ、えっと……兄さんに……お願いしたい事が……あるんだけど……」

うん? 冬香のやつ、何かやけに頬が赤くなっているような感じだけ?

それに何か、両手を絡めてモジモジしてるような……。

「ああ、何でも言ってくれていいぞ。可愛い妹の冬香のためだ、何でも叶えてやるぞ」

何でも叶えてやるなんて大袈裟な事を言ったけど、これはあくまでも俺の夢の中であって、現実ではないからな。

叶えようと思えば、本当に何でも叶える事が出来るだろうよ。

「わかった・・・それじゃあ・・・わたしのお願いを・・・言うね・・・」

「おう、何でもドンツとこいー」

冬香は、またもや上目遣いで恥ずかしそうな仕草をしながら・・・。

「わ、わたしを・・・抱きしめて・・・そして・・・」

俺はゴクリと唾を飲み込んで、静かに次の言葉を待った。

「キスして・・・欲しい・・・」

そう言った冬香は、顔を真っ赤にして俯いたまま固まっている。

そして、俺はというと「キタ　　、　　。　　）ノ

！！」という顔文字が頭の中を・・・いや、夢の中を駆け巡っていた。

【Part・15】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

ふ、冬香に・・・抱きしめて、キスして」とお願いされてしまった。

冬香は、血の繋がった俺の妹だというのに・・・。

まあ、ぶっちゃけ妹好きな俺としては・・・だが、それがいい！」と、むしろ大声で叫びたいくらい嬉しいけどな。

これが、俺の夢の中だとしても・・・。

俺は、冬香の肩に乗せていた両手をゆっくりと冬香の背中へと回し、そして冬香の小柄で華奢な体を抱きしめた。

冬香は、一瞬驚いた顔を見せたが、すぐにいつも通りの表情に戻り、恥ずかしいのか無言のまま俺の胸に顔を埋めた。

それから暫くして、いつまでも俺の胸に顔を押し付けたままの冬香に対して・・・。

「冬香？ 顔を見せてくれないと・・・キ、キスが出来ないんだけど?。」

「・・・うん」

冬香はそう言って、恥ずかしそうにしながらもゆっくりと顔を上げてくれた。

「そ、それじゃあ・・・め、目を閉じてくれるか?。」

「・・・うん」

冬香は、こちらに顔を向けたまま、静かに目を閉じた。

そんな姿の冬香を見て、俺はめっちゃ緊張していた。

これが夢だと分かっているのに……。

それにしても、夢の中でも緊張してするもんなんだなあ……な
どと考えていたら、少し緊張が和らいだ気がした。

さて、それじゃ可愛い妹の冬香の願いを叶えてあげますかね。

俺は静かに深呼吸をしたあと、ゆっくりと自分の顔を冬香の顔へ
近づけていく。

そして、冬香の小さくて可愛らしい唇へ、俺の唇が重なるうとし
た次の瞬間、突然夏香の怒声が俺の耳元に鳴り響いた。

「ちよつと兄貴！ いつまで寝てんのよ！」

声のした方へ顔を向けると、制服姿の夏香が鬼の形相で俺の真横
に立っていた。

そんな夏香の姿を見た俺は、何て空気の読めない、最悪のタイミ
ングで登場してくるんだこいつは！ と思い、俺の夢も完璧じゃね
えんだな……と落胆した。

まあ何にしても、夏香も俺の夢に出て来てしまったんだからどう
しようもない。

俺は、「はあ〜」と溜息をつきながら……。

「なあ夏香、俺をよく見てみる。今の俺のどこが寝ているんだ？
ちゃんと起きてるだろ？」

「何言ってるのよ！ しつかりベットで寝てんじゃないー！」

「い、いや、まあ、確かにリアル俺は寝ているけど、夢の中じゃ
あしっかり起きてるじゃんかよ」

と、大声で叫んで、ベットから飛び起きた。

【Part・16】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

ベットから飛び起きた俺は、一瞬何が起こったのか分からなかったが、俺が自分の部屋のベットの上において、俺の目の前では夏香が拳を握りしめて仁王立ちしている姿を見たら、大体の状況は把握出来た。

夢の中で夏香に殴られたかと思ったら、まさかリアルの方で殴られていたなんてな……。

「いてて……」

頬がめっちゃ痛い……。

また夏香に殴られるなんて、昨日に続いて超が付くほど最悪だ。

「どっ？　目が覚めた？」

夏香のやつ、何もなかったかのような顔をしてやがる。

「お前なあ、殴る時はもうちょっと手加減してくれよ」

俺は痛めた頬を手で押さえながら、無駄だと分かっているとも言わずにはいらなかった。

「何言ってるのよ、兄貴がちゃんと起きて来ないのが悪いんですよ。しかも、変な夢まで見てるし」

「変な夢だなんて酷いじゃねえか。俺にとっては凄く良いゆ……」

ぎゃふっ！」

このやろう！ 何で、またグーで殴るし！？

「はいはい、兄貴のエロイ夢の話はおしまい。あたしもう時間がないんだから、急いで朝食とお弁当の用意しておいてよ」

そう言っつて、夏香は部屋を出て行った。

俺は大きな溜息をついたあと、ベットから降りてトレーナーに着替え、一階のキッチンへと向かった。

その後、夏香は朝食を食べながら俺に対して、次から朝はちゃんと起きないと殴って起こすだの、変な夢は二度と見るななどと理不尽な事を言っつてやがった。

そんな夏香を玄関で見送ったあと、俺の唯一の至福の時間を満喫するため、冬香の部屋（まあ、夏香の部屋でもあるのだが）へと向かった。

二階へ上がり、冬香の部屋の前に来ると、俺はいつも通りに声をかける。

「おーい、冬香、入るぞー」

そう言っつたあと、部屋の中へと入る。

冬香はいつも通りに、二段ベットの下の段で眠っていた。

俺はベットの傍までいき、自分の顔を冬香の顔に近づける。

すると、冬香の「ス・、ス・」という寝息が聞こえてきた。

冬香のやつ、よく眠ってる。

あまり顔を近づけていると、思わずキスをしそうになるので、少し距離をおいた。

夢ではあったけれど、冬香とキスが出来なかったのは残念だった。もう少しという所で、夏香の乱入さえなければ……。

「まあ、夢の中での出来事だからな。よくよく考えたら、また同じ夢を見ればいいだけの話なんじゃ……」

しかし、夢ってのは、自分の見たい夢がいつでも見る事って可能なのか？ 何か、無理っぽいような気がするけど……。

とりあえずは、今日の夜にもう一度頑張ってみますかね。

何をどう頑張ればいいのか、よく分からんけどさ。

それから暫く、俺は静かに冬香の寝顔を見続けて、至福の時間を堪能した。

「よし、もう起こす時間だな」

俺は、冬香の顔を覗き込むような格好になり、声をかける。

「冬香、朝だぞ。早く起きないと、学校に遅刻するぞ。早くしないと、秋穂ちゃんが迎えに来ちゃうぞ」

「……」

冬香は、依然として睡眠中のままだ。

「冬香、起きろ、学校に遅刻するぞ。おい、冬香さん、聞こえますか？」 聞こえていたら返事をしてね」

「……」

うーん、やはりダメか……。

冬香のやつ、睡眠中なんじゃなくて、実は冬眠中なんじゃあるまいな？ なんて、そんな事あるわけねえけどさ。

「おーい、冬香。早く起きないと、お兄ちゃんがチューしちゃうぞ。いいのか？ 起きないと、本当にチューしちゃうからな」

「・・・」

「これでもダメか・・・」

くそ、本当にチューしたい！・・・けど、チューしちゃったら、冬香に嫌われそうだなあ。

「ここはやはり、最終手段に出るしかないか・・・」

俺は、冬香の両腕を掴んで小刻みに揺らしながら・・・

「冬香、起きろ、もう朝だぞ。おーい、冬香、頼むから起きてくれ。冬香、お願いだから起きて〜〜」

「・・・うん・・・」

「おっ、やっと起きたか？」

「うん・・・あつ、おはよう・・・兄さん・・・」

冬香はまだ眠そうだが、でも一度起きてしまえば大丈夫だろう。

「おはよう、冬香。早く着替えて、下に降りて来いよ。朝飯の用意が出来てるからな」

「うん・・・」

俺は冬香の返事を聞いたあと、部屋を出てリビングへと向かった。

【Part・17】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は今、冬香と一緒にリビングで朝飯を食べている。

冬香を目の前にしていると、つつい夢での出来事を思い出してしまう。

冬香を抱きしめ、それからキスを……。

あのシーンを思い出すと、今でも胸がドキドキしやがる。

「兄さん……どうしたの？」

「えっ？ 何が？」

突然、冬香に声をかけられて、ちょっとビックリしちゃった。

「何か……食欲がないみたい……」

「あ、ああ、別に何でもないんだ。ちょっと考え事してたからさ。大丈夫、ちゃんと食欲はあるから心配しなくていいぞ」

「うん……それならいいけど……」

いや、冬香に変な心配をかけたままな。

冬香を抱きしめて、キスをしそうになった夢の事を思い出していたんだよ……なんて、冬香には絶対言えねえ！

「ねえ、兄さん？……」

「うん？ どうした？」

「もうすぐゴールデンウィーク・・・だけど？」

ああ、そう言えばそうだったな。

「何だ？ 冬香はゴールデンウィーク、どこか行きたい所でもあるのか？」

俺がそう聞くと、冬香は少し考えてから・・・。

「うん・・・温泉に入りたい・・・」

「おお、なるほど、温泉かあ・・・。いいじゃないか温泉。夏香にも話してみて、予定を立てておくか？」

「うん・・・」

「それじゃあ、この話はまた晩飯の時に夏香も含めて、つつ事で」

「うん・・・わかった・・・」

それから、俺と冬香は朝飯が終わったあと各々の部屋へと戻り、その後いつも通りに秋穂ちゃんが冬香を迎えに来て、俺は二人を玄関で見送る。

それから暫くして、いつものように春菜が俺を迎えに来た。

「拓ちゃん、おはよう」

「おう、春菜、おはよう。それじゃあ学校へ・・・と、その前にや

る事があつたんだつたな」

「え？ 拓ちゃん、やる事って何をするの？」

春菜のやつ、昨日俺が言った事、もう忘れてやがる。

「昨日、学校で春菜に言っただろ？ 毎朝、春菜を抱きしめるってさ」

「えっ？ えっ？ えっ！？ た、拓ちゃんがわたしを・・・毎朝、だ、抱きしめるの？ で、でも、急にそんな事を言われても・・・わ、わたしも、こ、心の準備が・・・」

あらら、軽い冗談のつもりが、春菜のやつかなり動揺してるぞ。これは、ちよつと不味かつたかな。

「いや、悪いな、春菜。今言った事、冗談だから」

「え？ 冗談・・・なの？」

「ああ、そうなんだ。まさか、春菜がそんなに動揺するなんて思ってたかったからさ。本当にごめん」

「もう！ 拓ちゃん、酷いよ！ 最初は、急にあんな事を言われて驚いちゃったけど・・・でも、本当は・・・」

春菜のやつ、頬を膨らませて怒ったと思ったら、急に俯いて口籠っちゃったぞ。

「春菜、どうした？」

「あつ、べ、別に何でもないのでっ」

「そうか、ならいいけど。でも、本当にごめんな」

「うん、もう謝らなくてもいいよ。拓ちゃんだったから、許してあげる」

「おお、春菜、サンキュ・な」

「うんっ」

そう言った春菜は、いつもの屈託のない笑顔に戻っていた。

「それじゃあ、昨日の約束通り、鞆の中をみせてくれるか？」

「え？ わたしの鞆の中？」

今の春菜は、頭の上に「？」がいくつもあるような感じの顔をしてやがる。

「昨日、学校で言っただろ？ 毎朝、春菜が弁当を持って来ているか鞆の中をチェックしてやるって」

「あつ、ごめんなさい。すっかり忘れちゃってて」

「いいよ、いいよ。とりあえず、時間もない事だし、ちゃっちゃんと終わらせるぞ」

「あつ、うん・・・」

それから、春菜の鞆の中をチェックしたあと、俺たちは急いでバス停へと向かった。

春菜の弁当に関して言うておくと、今回はちゃんと持って来ていたという事だ。

【Part・18】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺と春菜は、いつもの満員状態で息苦しかったバスを降りて学校へと向かった。

バス亭から校門までは緩やかな上り坂になっていて、その坂を俺たちは横に並んでゆっくりと歩いて行く。

「ねえ、拓ちゃん？」

「うん？ どうした、春菜？」

「拓ちゃんは、ゴールデンウィークってどこかへ出かけるの？」

「ああ、ゴールデンウィークなら、妹たちと一緒に温泉にでも行くかと思ってるよ。今朝、冬香が温泉に入りたいって言うってたからな」

「温泉？ そうなんだ……。実はね、わたしも家族みんなで二日の温泉旅行に行く予定なの」

「そうか、春菜のとも温泉に行くのか」

「うん……」

そう返事をしたあとの春菜は、下を向いたまま何やら考え込んでいるみたいだった。

俺はそんな春菜を見て、ちょっと聞いてみた。

「なあ、春菜？ 何か、気になる事でもあるのか？」

俺がそう聞くと、春菜は下に向けていた視線を俺の顔に移し、何やら意を決したような表情をしながら……。

「あつ、あのね、拓ちゃん？」

「おお、どうした？」

「も、もし、良ければ……. なんだけど……. わたしたちと一緒に……温泉旅行に行かない？」

そう言ったあとの春菜の顔が、何だか少し赤くなっているように思えた。

しかし、なるほど…….

確かに俺たちも、春菜の家族と目的は同じだし、しかも春菜たちと一緒に行けば旅館までの交通手段がめっちゃ楽になる。

何故なら、春菜とこの親父さんは、七人乗りの車に乗っているから、春菜の家族と俺たち家族がちょうど一緒に乗れるってなわけなんだよな。

そして、美味しいのはそれだけじゃない。

旅館で春菜と秋穂ちゃんの浴衣姿を拝めるし、運が良ければ混浴で一緒に風呂が入れる！

なのだが…….

「春菜、ごめん。せっかく誘ってくれたのに悪いんだけど、それは遠慮しておくよ」

「あつ、謝らなくてもいいよ。拓ちゃんたちと一緒に旅行が出来た

ら、楽しいだろうなって、わたしが勝手に思ったただけだからっ

そうは言ってるけど、春菜のやつ、何となく無理して笑ってるって感じだな。

断つたのは、やっぱり不味かったかなあ。
でもなあ……。

「いや、俺だけだったら一緒にいっても良かったんだけどさ。妹たちが、春菜や秋穂ちゃんが両親と仲良く楽しそうにしているのを見たら、羨ましくて寂しい思いをするんじゃないかと思ってね。だから、本当にごめんな」

「いいの、いいの。わたしは全然平気だから。だから拓ちゃん、あまり気にしないで」

「あ、ああ」

春菜は、少し元気になったみたいだ。
とりあえずは、良かった。

「拓ちゃんって、昔から変わってないね」

「そうか？」

「だって……。昔から、凄く妹さん思いなんだもん」

「ま、まあ、別に普通だと思うぞ」

「ぜ、絶対に妹好きだからなんて言えねえ！

「そんな事ないよ。拓ちゃんは、すつごく妹さん思いだよ。あゝあ、わたしも、拓ちゃんの妹に生まれたかったな。・・・あ、でも、妹だと」

「俺は、春菜が幼馴染みで良かったと思うぞ。春菜には、今まで勉強とか料理の事とか色々世話になって助けてもらってるからな」

「えっ？　そ、そうかな？」

「ああ。春菜には、凄く感謝してる」

俺がそう言ったあと、春菜の顔が、どんどん赤くなっていくのが分かる。

「あつ、な、何だか、ちょっと恥ずかしくなってきた。でも、拓ちゃんにそう言ってもらえて、凄く嬉しいな。やっぱり、わたしも、拓ちゃんの幼馴染みで良かったって思うよ」

そう言った春菜は、顔を赤くしながらも、いつもの屈託のない笑顔を見せていた。

俺はそんな春菜を見て、少し胸の奥がドキッとしたのを感じた。

そして、俺はそんな心の動揺を春菜に悟られまいとしながら校舎に入り、二人一緒に教室へと向かった。

【Part・19】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・19】

俺と春菜は教室に入り、それぞれ自分の席へと向かった。

「おはよう、拓也」

俺が自分の席に座ったのと同時に、清彦が恒例の挨拶をしてきた。それに対して、俺も「おお、おはよう」と恒例である挨拶を清彦に返した。

「ねえ、拓也？」

「おお、どうした？」

清彦は、一度春菜の席を見たあと、俺の顔を見て……。

「今日はどうしたの？ 春菜ちゃんと何かあった？」

「唐突に、な、何かあったって何だよ？ べ、別に春菜とは何もないぞ」

「え？ そうなの？」

「そつだよ」

清彦が、何やら不思議そうな顔をしてやがるんだが、一体何なんだ？

「そっか、別に何もなければいいんだけどさ。ただ何となくなんだけど、拓也が春菜ちゃんを避けてるような感じがしたから・・・」

「何言ってるんだよ。俺が春菜の事を避けたりするわけないだろ。だから、変な心配はするなよ」

「うん、そうだね。変な事を聞いて悪かったね」

「ああ、いいつて、いいつて」

俺が春菜の笑顔にドキツとしたあと、恥ずかしさからなのか春菜の顔をまともに見る事が出来なくなっちゃったから、その事が清彦には俺が春菜を避けてると見えたのかもしれないな。

それにしても、これって一体何なんだ？ 清彦が言うように、俺は春菜の事が好きなのか？ 妹好きである俺が・・・幼馴染みの春菜を・・・

うーん、分からん！ 自分の気持ちも、さっぱり分からん！

今まで春菜の事を特別意識した事なんてなかったからな。

ま、まさか！？ 俺って、妹好きと幼馴染み好きの二つの属性があったのか！？

・・・て、今頃になって、それはないか。

まあ、とりあえず分からん事は、保留って事で。

その後は、いつもと変わらぬ退屈な授業で始まり、何とか居眠りせずに午前の授業をやり終えた。

そして、今は昼休みとなり、席を向かい合わせて清彦と弁当を食べている。

「なあ、清彦？」

「え？ なあに？」

「お前はゴールデンウィークって、どっか行くのか？」

「うん、僕は家族で父親の実家に行く予定だよ。凄く田舎な所だから、ノーパス持ってギャルゲーでもやってようかなって思ってるんだ」

「田舎に行ってもギャルゲーかよ。お前、ほんとに好きだな」

「まあね。僕の命と呼べる物だからね」

清彦のやつ、嬉しそうな顔をして言っただけだよ。

まあ、俺もギャルゲーに関しては、清彦ほどではないにしろ好きな方だから分からなくもないが……。

「ところでさ、拓也の方はどうなの？ ゴールデンウィーク、どこかへ行かないの？」

「俺は妹たちを連れて、一泊二日の温泉旅行にでも行くところかと思ってる」

「へえ、いいね温泉旅行。僕も温泉とかが良かったなあ」

「お前の場合は温泉だろうが何だろうが、結局ギャルゲーはやるんだろ？」

「そうだね。それだけは外せないからね」

「ああ、そうだろうな」

俺は半分呆れながら、また弁当を食べ始めた。

【Part・20】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・20】

今は昼休み中で、清彦と仲良く弁当を食べている最中だったのだが……。

佐伯のやつがいきなり俺の机を両手で叩き、ドンツ！と大太鼓でも鳴らしたかのようなうるさい音を鳴らしやがった。

「おい、御堂！」

何か、佐伯が凄い剣幕な感じなんですけど……。
俺、何かやらかしたのか？

「いきなり何だよ。俺が、お前に何かしたのか？」

「あたしじゃない！」

は？ あたしじゃないって……。
それじゃあ、何でこいつ怒ってるんだ？

「お前に何かしたわけじゃないのに、何でお前が怒ってるんだよ？」

「あたしは聞いたわよ！ 御堂、あんた！ 今朝、いやがる春菜を無理やり抱きしめたそうじゃない！」

「何だって！？ 俺が春菜を無理やり抱きしめた！？」

「え〜！ それ本当なの、拓也！？ 僕、拓也の事見損なつたよ……」

「・」

「い、いや待て、佐伯も清彦もちよつと落ち着け」

「これが落ち着いてなんていられると思う!? 春菜は、あたしの大切な親友なのよ! その親友を悲しませた罪、万死に値するわ!」

ちよつ! 佐伯のやつ万死つて、それ酷くね!? てか、そもそも濡れ衣じゃねえか!

「ま、まあ、少し落ち着け。まずは、俺の話を・・・」

「罪人の戯言なんか、一切聞く耳なし! 成敗っ!」

「ちよ! まっ! ぎゃあああ!!」

問答無用で、佐伯に右頬を思いつきり殴られ、俺は椅子から転げ落ちた。

「いててて・・・」

「どう、御堂? 少しは自分の犯した罪の重さが理解出来た?」

このやろう! いきなり殴るとは何ちゆうやろうだ!
まったく、俺はお前が理解出来ねえよ!

「た、拓ちゃん大丈夫!？」

春菜が俺の傍へ来て、心配そうな顔をしてやがるぞ。

「ああ、心配ない。この程度の事は、日常茶飯事だからな」

俺は殴られた頬を手で抑えながら、春菜に告げた。
そんな俺の言葉に、春菜は少し安心したようだった。

「春菜、そんなやつ庇う事ないよ」

「優子ちゃん、違うの！ 拓ちゃんは、わたしを抱きしめてなんかいないの！」

「え？ だって春菜、さっき御堂に抱きしめられたって？」

「そうじゃなくて、全然違うの。拓ちゃんは、冗談でわたしを抱きしめるって言っただけで・・・実際には、何もしてないの」

「え？ そうだったの？」

佐伯が、真実を知って目を丸くしているぞ。

これで、俺の無実の罪もやっと晴れたか・・・。

「そうだよ。優子ちゃん、最後までわたしの話を聞かないで行っちゃうんだもん」

「あちゃゝ。なあゝんだ、あたしの早とちりだったのね。ゴメン、御堂。あたしの勘違いだった」

佐伯は手を合わせながら、深深と頭を下げて俺に謝った。
つつても、今更なんだが・・・。

「お前なあ、謝ってくれても殴られた頬の痛みは取れねえんだぞ。」

どうしてくれんだよ、この痛み」

俺は、少し大袈裟に痛めた頬を手で摩った。

「ふん、謝っただけじゃ、やっぱりダメか。それじゃあ、このお詫びはいずれさせてもらうから、それでいいでしょ？」

「佐伯、絶対だぞ。俺は、忘れないからな」

「はいはい、あたしは約束を守る方だから、心配なんていらないわよ」

うーむ、確かにこいつは、一度交わした約束を破ったりするやつじゃないな。

「それじゃあ、この件はこれで終わりだ。佐伯も春菜も、早く自分の席へ戻れ、もうすぐ午後の授業が始まるぞ」

すでに、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴っていた。

「拓ちゃん、ごめんね。わたしのせいで・・・」

「いって、いって、別に春菜のせいじゃないし」

「でも・・・」

「悪いのは、早とちりした佐伯のやつだし。それに、俺はこんな事へっちゃらだからさ」

「本当に大丈夫？」

春菜が、また心配そうな顔をしてやがる。

「春菜は心配性だな。俺本人が大丈夫って言ってるんだ、何も気にするな。そんな事より、もうすぐ授業が始まるぞ。早く、自分の席に戻れよ」

「うん、わかった・・・」

何とか、春菜は納得してくれたみたいだ。

そして春菜と佐伯は、自分の席へと戻って行った。

「拓也も、何か凄い災難だったね。でも、良かったよ。拓也が、春菜ちゃんを悲しめるような事してなくて」

「バカやろう、当たり前だろ。何で俺が、春菜を悲しませないといけないんだよ」

「そうだよ。だって、拓也・・・春菜ちゃんの事が好きだものね」

「ば、ばか、な、何で俺が、春菜を・・・」

「はいはい、まあまあ、いいからいいから」

何だ、清彦のこの赤子でもあやすような仕草は？

まあでも、正直なところ、俺も自分の気持ちがよく分かってねえからなあ・・・。

「あつ、もう先生が来ちゃったね」

そう言うと、清彦は横に向けていた体を前に戻した。

そして、午後の退屈な授業が始まった。

本来なら、弁当を食った後の午後の授業が一番眠くなるのだが、さつき佐伯に殴られた頬の痛みでまったく眠気が起こる気配がなかった。

まあ、これはこれで良しと考えるかな・・・痛いけどさ。

【Part・21】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

午後の授業が終わって放課後となり、清彦と春菜に「部活、頑張れよ」と声をかけ、佐伯のやつには「約束、忘れんなよ」と釘を刺して、帰宅部・・・ではなく、ゲーム研究同好会の幽霊会員である俺は、幽霊会員という名を汚す事なく、さっさと学校を出て家に帰って来た。

玄関に入ると、いつも俺より先に帰っているはずの冬香の靴が見当たらなかった。

「あれ？ 冬香のやつ、まだ帰って来てないのか？」

家の中を見て回ったが誰もいない。

うーん、めずらしいな、冬香がまだ帰っていないなんてな。

まあ、多分図書館か書店にでも寄って本でも読んでいるんだろう。実際のところ、たまにだけ冬香は、図書館や書店に寄り道をしてくる事がある。

と言っても、いつもより一、二時間遅く帰って来る程度だから、俺としては別に心配はしていない。

てなわけで家の探索も終わり、俺は自分の部屋に入って制服を脱ぎ、トレーナーに着替えてベットに横になった。

「それにしても、今日は二度も殴られたなあ・・・」

佐伯に殴られた右頬が、まだ少しヒリヒリと痛む。

今朝は夏香に左頬を殴られ、昼間には右頬を佐伯に殴られるという、何ちゅう最悪な一日なんだ。

ああでも、殴られたという強烈なインパクトで忘れそうになっていたが、今朝の春菜の笑顔を見た時の胸の高鳴りが何なのか？　これは一体どういう事なんだろうか？

俺は、春菜の事が好きなんだろうか？　それとも、別の何かの感情なのだろうか？

ん〜、春菜とは生まれた時からずっと一緒に、春菜が俺の傍にいるという事が自然な事であり当たり前な事だったからなあ。

「春菜との距離が近すぎて、自分の本当の気持ちに気付いていないだけなのか？」

う〜ん、分からん、さっぱり分からん。

自分自身の気持ちが変わらないって、俺ってばアホなんだろうか？　いやいや、自分で自分を貶めてどうすんだよ。

「ふ〜」

俺は、小さく溜息をついた。

まあ、これ以上アレコレ考えていても、答えが出ないんじゃないでしょうもないよな。

とりあえず、この件は保留にしておくしかないか。

「さあ〜て、何だか少し眠くなって来たな。少し、眠っておくとするか」

俺は、ベットに横になったまま静かに目を閉じた。

それから、俺は少しだけ眠るつもりだったのが、どうやらやらすつかり寝入ってしまったらしく、昨日と同じくいつの間にか帰って来ていた冬香に起こされた。

冬香は学校の制服姿のまま、俺のベットの傍にいた。

冬香がまだ制服を着ているという事は、きっとさっき帰って来たばかりなのだろう。

「冬香、帰ってたのか？」

「うん・・・ただいま・・・」

「おお、お帰り。今日は図書館にでも寄っていたのか？」

「違う・・・古書店に寄って、気に入った本を探してた・・・」

「そうか。それで、何か冬香のお目に叶った本はあったのか？」

「うん・・・色々あった・・・」

「それは良かったな」

「うん・・・」

冬香は小さく頷いて、どことなく嬉しそうな顔をしているように思えた。

「ねえ、兄さん？・・・」

「おお、何だ？」

「もうすぐ・・・夏香が帰って来る・・・」

俺はベットの脇に置いてある目覚まし時計に目をやると、確かにあと三十分ほどで夏香が帰って来る時間だった。

「おっと、これは急いで風呂を沸かしておかないと不味いな。起こしてくれて、ありがとな冬香」

「うん・・・」

俺はその後、急いで風呂を沸かし、それからキッチンで晩飯の用意を始めた。

【Part・22】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・22】

夏香が学校から帰って来て、今はリビングにあるテーブルにて兄妹三人で晩飯を食べている。

飯を食べ始めてから暫くして、俺は今朝冬香と話をした温泉旅行についての話題を口に出した。

「なあ、夏香？」

「何？」

夏香は箸の動きを止めることなく、視線は食卓に釘付けのままだ。人の話を聞く時は、飯を食うのはやめると夏香に言ってやりたいけど、どうせ俺の言う事なんて聞きやしねえからな、こいつは。

「今朝、ゴールデンウィークの事で、冬香と話をしたんだけどさ」

「ゴールデンウィーク？ ゴールデンウィークがどうかしたの？」

「実は、ゴールデンウィークの三連休、三日の日から一泊二日で温泉旅行なんてどうかなって思っているんだけど？」

「一泊二日の温泉旅行？」

夏香が箸の動きを止めて、やっとこちらに視線を向けてくれた。少しは興味を持ってくれたみたいだな。

「ああ、温泉旅行だ。今朝、冬香がゴールデンウィークは温泉に入りたいって言うからさ。それで、夏香の方はどうなのか意見を聞きたいんだけど？」

「良い！ 凄く良いと思うよ温泉！ 冬香、ナイスアイデア！」

夏香は、冬香の手を握りしめて、めっちゃめっちゃ喜んでやがる。

「ちょうど三日からの三連休は、部活が休みだし。何より、日頃の厳しい練習の疲れが温泉で癒せるのは嬉しい限りかも」

夏香のやつ、何だか今にもスキップして家の中を駆けずり回りそうな感じだぞ。

「それじゃあ、三日の日から一泊二日で温泉旅行、決定って事でないな？」

「オツケー、いいよ」

「わたしも・・・それでいい・・・」

「よし、分かった。じゃあ、旅館の方は俺が良さそうな所を探しておくからな」

「なるべく、美味しい料理が出る所にしてよ」

「わたしは、温泉が広い所・・・」

ゴールデンウィーク間近で、旅館の予約が取れるかどうかも分からねえっていうのに、二人とも好き勝手な事言ってやがる。

「分かった、分かった。なるべく二人の要望に答えられるよう努力するよ」

「お願いね」

「兄さんを・・・信じてる・・・」

「はいはい、りょくかい」

まあ、とりあえず何とかなるだろ。

まったく根拠はないけどな・・・ハハハ・・・ハア。

その後、食事も終わり、俺たちは各々の部屋へと戻って行った。

俺は、自分の部屋へ入ると勉強机の椅子に座り、鍵付の引き出しから『俺による、俺のための妹育成計画！』のノートを出した。

机の上にノートを広げ、何も書いていないページを眺めながら大きな溜息をついた。

「妹育成計画が、まったく進んでいないんだが・・・。いつになったら計画を実行出来るんだ？ てか、計画すら練ってない状態じゃねえか」

まあ、こればかりは焦っても仕方がないんだが・・・。

とりあえず、ゴールデンウィークが明けてから清彦にでも相談してみるかな。

俺は広げたノートを閉じて、また元の鍵付の引き出しへと仕舞った。

それから、いつものように風呂に入ったあとギャルゲーを満喫して、ベットに横になった。

「さてさて、今夜は昨日の冬香との夢のような・・・てか、夢じゃねえか。まあ、夢でも構わないから、冬香とキスが出来ますように俺様！　しっかりと頼むぜ！」

自分で自分をお願いするって、何か変だな。

ま、まあいいか、美味しい夢が見られるなら何でも構わねえさ！

「それじゃあ・・・おやすみ!..!」

俺は勢い良く目を閉じたあと、徐々に眠りに落ちていった。

【Part・23】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・23】

音が聞こえる……。

規則正しいリズムで、何かを叩く音……。

これは何の音だ？ 太鼓？ ……じゃなそうだな。

俺は閉じていた瞼をゆっくりと開く。

そして、俺の意識が徐々に覚醒していくような感覚がして、それに伴い音も少しずつはつきりと耳に聞こえてきた。

そして、音以外にも何か聞こえる……。

「……き……てる？」

ん？ 扉越しに、誰かの声が聞こえる。

俺は、耳に神経を研ぎ済ませ、次は全てを聞き逃さすまいとした。俺の部屋の扉を二度叩く音がした。

そして……。

「兄貴、起きてる？」

あれ？ この声は夏香じゃないか。

ベットの脇に置いてある目覚まし時計に目をやると、今は深夜の二時を過ぎた所だった。

夏香のやつ、こんな時間に一体どうしたんだ？

俺は、夏香の行動を不思議に思いながら、扉越しにいる夏香へ声をかけた。

「ああ、起きてるぞ。どうしたんだよ夏香、こんな夜更けに？」

「あのさ、ちょっと部屋に入ってもいいかな？　どうしても、兄貴に話したい事があるの」

あれ？　こいつ夏香だよな？　いつもだったら、俺に確認を取る事なくいきなり部屋の中へ入って来るはずなのに。

それが、何故か今に限っては「部屋に入っている？」と、わざわざ俺に確認を取っている。

まあ、何にせよ、こんな夜更けに、いつまでも扉の前に立たせておく訳にはいかないよな。

「別に構わないから、部屋に入ってきて来いよ」

「うん、分かった。じゃあ、入るね」

扉が静かに開き、夏香が俺の部屋へと入って来た。

扉の横に部屋の明かりを点けるスイッチがある為、俺は夏香にそのスイッチを入れてくれと言った。

だが、夏香は……。

「部屋の明かりは、消したままでお願い」

「え？　何で？」

「いいから、このままでお願いっ」

「わ、わかった。別に夏香がいつていうなら、俺はこのままでもいいよ」

「ありがとう」

夏香が、何故明かりを点ける事を嫌がったのか？ 俺には分からない。

けどまあ、明かりを点けなくても、カーテンの隙間から差し込む月の光で、夏香の姿を視認する事は出来る。

夏香はティーシャツとショートパンツという姿で、流石にこの暗さでは服装の色までは分からないが、露出度が高い服装だと言わざるおえない感じた。

俺は兄ではあるけど、一人の男でもある・・・てか、妹好きな俺にとつて今の夏香の姿は、思わず胸の奥がドキドキしてしまうほど強烈だ。

そんな夏香は、俺の気持ちを知ってか知らずかは分からないが、俺の寝ているベットの側まで歩いて来ると、クルツと後ろ向きになってベットの端に腰を下ろした。

俺はベットの上で上半身を起こしてる状態で、夏香はそんな俺に對して背を向けた状態で座っている。

俺のすぐ傍には夏香がいて、少し手を伸ばせば夏香を抱きしめる事が出来る。

だけど、いきなり抱きしめたら確実に夏香の鉄拳が俺の顔面を襲うだろう。

それでも、何故か俺は夏香を抱きしめたいと思ってしまった。

それは多分、俺には夏香の背中が、何故だか寂しそうな感じに見えたからなのかもしれない。

【Part・24】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

深夜二時を過ぎた頃、夏香が俺の部屋にやって来た。

そして夏香は今、俺の傍で、俺に背を向けた状態でベットの端に座っている。

そんな夏香の姿は、いつもとは違い、どことなく寂しげに感じた。夏香は、何やら俺に話したい事があると云っていたのだが、暫く待っても一向に話をする気配がなく、ただ俯き黙ったままだった。

そんな夏香の後ろ姿を見つめていた俺は、何か突然催眠にでもかかったかのようにゆっくりと手を伸ばし、そして俺の両腕がやさしく夏香の体を包み込んだ。

いきなりそんな事をすれば、夏香に殴られると分かっていたながらも、何故かそうせずにはいられなかった。

夏香は一瞬、ピクツと体が動いたが、その後は俺の事を殴るでも罵倒するでもなく、ただ俺の成すがままにじっとしていた。

「夏香、俺を殴らないのか？」

俺は、夏香を後ろから抱きしめたまま、夏香の耳元で静かに囁いた。

「今は……。今は、このままでいいの……。あたしが、そうして欲しいって思っているから」

そう返って来た夏香の言葉に、俺は少し驚いた。

夏香に殴られないのは凄く助かるけど、夏香の様子がいつもと違うのが気になる……。てか、心配なんだが。

「何か、悩みでもあるのか？ もし、何かあるなら、俺に何でも話してくれていいんだぞ。この俺が、悩みだろうが何だろうが全てを解決してやるからさ」

夏香は、「クスツ」と小さく声に出して笑った。

「兄貴は凄いなだね。兄貴は、あたしのヒーローか何かなの？」

「お、おお、そうだぞ。俺は夏香の兄であり、そして夏香を助けるヒーローでもあるのさ。何だ、今頃気が付いたのかよ？」

「まったく、兄貴は調子いいんだから。ヒーローのくせして、いつもあたしに殴られてるじゃん」

「ば、ばかつ、あ、あれは、わざと夏香に殴らせているんだよ」

「はい、はい、分かりました」

そう言って、夏香はクスクスと笑っていた。

何か、いつもの夏香に戻ったみたいで、俺は少しホツとした。

「それで、本当にどうしたんだ？ 悩みがあるなら、ちゃんと相談に乗るぞ」

俺は改めて、夏香へ聞いてみた。

そして、ほんの少しの沈黙のあと……。

「あたしね、ときどき……本当にときどきなんだけど、今みたいはどうしようもなく寂しくなる時があるんだ」

「そう・・・なのか？」

「うん・・・。兄貴、ちょっとビックリしたでしょ？」

「あ、ああ。まさか、いつも元気一杯の夏香が・・・って思ったけどさ。でも、それには、何か訳があるんだろ？」

夏香は、また少し沈黙したあと・・・。

「あたしと冬香が生まれた後、暫くして母さんは亡くなったんですよ？」

「ああ、そうらしいな。俺も、親父から聞いた話までしか分からないけどな」

「あたしね、写真でしか知らない母さんの事を凄く想う時があるんだ。あたしたちの母さんって、どんな人だったんだろう？ 一度だけいいから、あたしの名前を呼んで欲しい。一度だけいいから、一緒に・・・。絶対に叶う事なんてないのにね。そんな風に思っちゃうと、何だか凄く切なくて、凄く寂しくなって・・・」

夏香の肩が小刻みに震えている。

そして、夏香を包み込んでいる俺の腕に次々と冷たい物が当たって、下に流れ落ちる感触があった。

夏香の顔を見なくても、俺には分かった。

夏香は、涙を流して泣いていた・・・。

【Part・25】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

いつも明るく元気一杯の夏香が、今は両の目に涙を浮かべながら泣いている……。

俺は、夏香の体をやさしく包み込んでいた両腕に力を込めた。

夏香の小柄で健康的な体が、更に小さく感じる。

俺は、何も知らなかった。

夏香の切なさを……。

夏香の寂しさを……。

夏香の悲しみを……。

「俺は、兄貴失格だな……」

囁くような声で、独り言のように俺はそう呟いた。

「ごめん……。夏香の寂しさに、気付いてやれなくて……本当にごめん」

夏香を励ましてあげたいと思った。

でも、どう言っただ励ませばいいのか、良い言葉が思い浮かばない。

結局、そんな不甲斐ない自分に憤りを感じつつ、俺は夏香に対して、ただ謝る事しか出来なかった……。

それから暫くの間、夏香は泣き続けた。

俺はそんな夏香を、黙って力強く抱きしめていた。

そして、いつの間にか俺の腕に当たり続けていた冷たい感触がなくなり、それはどうやら夏香の涙が止まって、泣き止んだのだという事が分かった。

そして、泣いた事で少し落ち着いたのか、夏香がやっとまた口を開いてくれた。

「兄貴はさ……。兄貴失格なんかじゃないよ。それはさ、兄貴つてエロイし、シスコンだし、変態だし、朝はちゃんと起きれないしで色々ダメダメな所はあるけどさ……」

な、何か、もの凄く酷い事を言われているような気が……。

「でも、それでも……。兄貴は、あたしや冬香の事を大切に、大事に思ってくれているって感じるし、それに家の事だって、毎日の炊事・掃除・洗濯をあたしや冬香に手伝えなんて一言も言わずに、文句一つ言わないで一生懸命やってくれているし……」

夏香は、少し言葉を切ったあと……。

「そ、それにさ、今だって……。今だって、寂しさに押しつぶされそうになってたあたしを……。こ、こうやって……。やさしく抱きしめてくれてるじゃん。だ、だからさ、兄貴は……。兄貴は、間違いなくあたしと冬香の兄貴だよ」

黙って夏香の話を聞いていた俺は、もの凄い感動と喜びに満ちていた。

「そ、そうか。夏香が、俺の事をそんな風に思ってくれたなんて……。俺は、凄く嬉しいよ」

な、何だか、今度は俺の方が嬉し涙を流したくなって来た。

「兄貴？　どうかした？」

「い、いや、別に何でもないよ」

俺の瞳は、少し潤んでいた。

「なあ夏香？　また、今日みたいに寂しくてどうしようもなくなつた時は、いつでも俺を頼ってくれていいからな」

「うん……。ありがとう」

夏香は、俺の腕にそつと手を添えて恥ずかしそうに頷いた。

そんな夏香を、俺はめっちゃめっちゃ可愛いと思った。

や、やばい！　ちよ、ちよつと待て俺！？　何か、もの凄く夏香にキスをしたくなって来ちまつたぞ！

だ〜！　マズイ！　理性という強固な扉がガラガラと崩れる音がするう〜！

夏香を後ろから抱きしめている状態の為、夏香の体と俺の体は非常に密着度が高く、しかも夏香の服装が半袖のTシャツにショートパンツという露出度が高いというのも理性の崩壊に拍車をかける結果となり、そして遂には俺の中にある強固であるはずの理性の扉が、完全に崩壊してしまった。

その瞬間、俺は夏香を抱きしめていた腕を解き、そして解放された手を夏香の両肩に置いて、夏香の体を俺の方へ向けさせた。

咄嗟の事で、夏香は少し驚いていたが、そんな事はお構いなしに俺は次の行動に移る。

俺は夏香の両肩に手を置いたまま、ゆっくりと夏香の顔へ自分の顔を近づけていく。

夏香の小さくて可愛い唇が徐々に近づき、そして俺の唇と夏香の唇が重なるうとした次の瞬間、夏香の右フックが俺の左頬を貫いた。

「いてゝゝゝ！」

と、俺は大声で叫んだ後、殴られた頬を手で抑えながらベツトに倒れ込んだ。

「もう！いきなり何すんのよバカア！本当にエロ兄貴なんだから！もう最低っ！」

夏香はその場に立って激怒したあと、酷くお怒りになった状態のまま、俺の部屋を出て行ってしまった。

夏香の言う通り、確かに俺は最低だ。

だけど、夏香がいつもの夏香に戻ってくれて、心の底から良かったと思った。

俺は、ついさっき夏香に殴られた頬のヒリヒリとした痛みを感じつつも、今日は気持ち良く眠れそうだな・・・と思った。

そして、ベツトに横になった俺は、今日二度目の眠りに落ちていった。

【Part・25】（後書き）

Part・23～Part・25までの話は、冬香の時と同じく拓也の夢の中での出来事として書くつもりでしたが、話を書いている途中で夢だと流石に無理がある展開だと思い、夢の中の出来事という設定は断念しました（^^）；

夢の中という設定にすると、何でもありという感じに話を書けるので、色々と想像が出来て楽しくなってくるので（笑）

出来れば、これからもちよくちよくと夢の話を書きたいなあって思っています（^^）

【Part・26】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は目覚まし時計の音で目を覚まし・・・てか、久しぶりにちゃんと起きる事が出来て、どうやら今日は夏香に殴られて起こされるという最悪な事態は免れる事が出来たようだ。

ベットから起き上がった俺は、トレ・ナ・に着替えて一階のキッチンへと向かった。

キッチンへ入ると、いつものように朝飯と弁当の準備をする。

俺がキッチンに入ってから三十分程が経ち、ちょうど朝飯の用意が出来た頃、夏香が制服姿でリビングへとやって来た。

俺は、夏香に「おはよう」と声をかけた。

そして夏香は、何故か俺との視線を逸らしながら・・・。

「お、おはよう」

と、何だかぎこちない挨拶だった。

「もう、朝飯出来てるぞ」

「あつ、うん・・・」

夏香はそう言ったあと、椅子に座ってテーブルの上に並べられた朝飯を食べ始めた。

それから暫く、俺も夏香もお互いに一言も発せず沈黙の時が流れた。

そして、夏香は朝飯を食べ終わると食器を流し台へ持って行き、弁当を鞆に入れて玄関へと向かった。

俺も夏香を見送るため、夏香の後を追って玄関に向かう。

「それじゃあ、行ってくるね」

「お、おう。部活、頑張れよ」

「うん」

夏香は相変わらず、俺と目線を合わせようとしない。

そして、夏香が玄関の扉を開けて外に出ようとして一旦その場に立ち止まり、俺に背を向けたまま……。

「あ、兄貴、ありがとね」

と、言った。

俺は、「あ、ああ」と、咄嗟の事でそんな言葉しか返してやれなかった。

そして、夏香は玄関の扉を閉めて学校へと向かった。

夏香が俺と目線を合わせず、どことなく言葉がたどどしかったのは、俺に礼を言うタイミングをうかがっていたのと、その恥ずかしさからなんだと感じた。

それと、さっき夏香が言った「ありがと」というのは、きっと夜中の出来事に対しての事なんだろう。

まあ、また寂しさに耐えられなくなった時は、俺を頼ってくれればいいぞ。

可愛い妹の為なら、この命をかけて全力で助けてやるからさ。

それから、俺は一度大きく深呼吸したあと……。

「さあ、それじゃあ至福の一時を満喫しに行きますかね」

俺はそう言ってから二階への階段を上り、そして冬香の部屋に入るといつもと同じく冬香の眠っているベットの傍で、冬香の寝顔を静かに見つめていた。

それから暫く、冬香の寝顔を眺めていて俺はふと、夜中に泣いていた夏香の姿を思い出し、もしかして冬香も夏香と同じように今は亡きお袋の事で、寂しい思いや悲しい思いをしているのだろうか？
と思った。

うーん、どうなんだろう？ 冬香に聞いてみたい気もするし、こ
ういうのは聞かない方がいいのかなって気もするし・・・。

うーむ、聞いた方がいいんだろうか？ それとも、聞かない方が
・・・。

ああ！ ダメだダメだ！ いくら考えても結論が出ねえ！

とりあえずは、暫くの間冬香の様子を見て判断するという事にし
よう。

それと、夏香に聞いてみるのもいいかもしれないな。

お袋の事に関しては、夏香や冬香と同じく俺が小さかった時に亡
くなっているから、お袋がどんな人だったのか？ なんて記憶はま
ったくない。

まあ、写真で見える限りではやさしそうな感じで、凄く綺麗な人だ
ったんだなって思う。

夏香と冬香の勉強机の上には、お袋の写真が写真立てに入れられ
て置かれている。

俺は、その写真立てを手に取って見てみる。

そこに写っているお袋は、俺の部屋の棚の中に置かれている写真
と一緒に物だ。

胸元まで伸びた艶のある黒髪と真珠のような黒い瞳、そして透き
通るような白くて細い手足、顔は美人というよりも見た目が実年齢
より随分若く見える可愛い感じの顔立ち。

夏香と冬香は、間違いなくお袋似だな。

妹と結婚が出来ないのは残念だけど、二人の将来が非常に楽しみ

になつてくる。

「お袋、天国から安心して見ててくれよ。夏香と冬香は、この俺が必ず立派な大人に・・・もそうだけど、その前に俺の理想の妹に育ててみせるからな！」

と、心に誓った。

【Part・27】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

いつもの如く、なかなか起きてくれない冬香を起こすのに苦労したあと、俺はリビングへとやって来た。

テーブルの上に置かれたラップに包まれているおかずをレンジで温め、お茶の用意をし、朝飯の支度が整い終わってから暫くして、部屋着姿の冬香が二階から降りて来た。

「朝飯、もう出来てるぞ」

「うん……」

俺と冬香は椅子に座って、テーブルの上に並べられた朝飯を食べ始めた。

そして、食事を始めてすぐに、冬香が俺に話し掛けて来た。

「ねえ、兄さん……？」

「おう、どうした？」

冬香は夏香と違い、俺と話す時は箸を茶碗の上に置いて食べるのを中断していた。

流石は冬香、ちゃんとマナーを心得てる。

夏香も、少しは冬香を見習って欲しいと思いつつ、冬香の次なる言葉を待った。

「夜中に……夏香と何かあった？」

「うん？ ああ、夜中の事か？ いや、夜中は夏香が突然、俺の部屋に……って、ええ！？」

俺は思わず、夜中に起きた夏香との一件をすっかり冬香に喋りそうになった。

そして、何より冬香が夜中の出来事に気付いていた事に正直驚いた。

「兄さんの部屋で……夏香と何があつたの？」

や、や、や、やべ〜！ うっかり口が滑っちゃまったじゃんか！

「い、いや、夜中は……えっと……え、えっと……」

ふ、冬香の俺を見る視線が何だか痛いような……。

ど、どうすりゃいいんだ、この状況……。

……って、ん？ 待てよ。

今は朝飯を食べてる最中で、早く食べないと学校に遅刻しちゃうといった状況でもある。

て、事はだ……。

うん、ここは一先ず、問題の先送りという手でいくしかないか。

俺は、何とも冴えない苦肉の策を労する事とした。

「兄さん？……どうかした？」

「え？ あ、いや、何でもないよ」

俺が暫く考え込んでいたから、冬香が少し心配したみたいだ。

「なあ、冬香？」

「何？・・・」

「今はさ、朝飯を食べてる最中で時間もない事だし、この件の話は学校が終わって戻ってからするって事でいいか？」

冬香は、少し考えたあと・・・。

「うん・・・分かった・・・」

と、言ってくれた。

俺は、その冬香の返事を聞いて少し落ち着きを取り戻した。

それから、俺と冬香は朝飯を食べ終わり、その後暫くしていつも通りに秋穂ちゃんやんが冬香を迎えに来てくれた。

そして、二人が仲良さそうに喋りながら学校へ向かうのを、俺は軽く手を振りながら見送った。

【Part・28】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・28】

冬香と秋穂ちゃんを見送ったあと、暫くして春菜が迎えに来た。そして、学校へ向かった俺と春菜はバスを降りて、今は学校前の緩い上り坂をゆったりとした足取りで歩いている。

「ねえ、拓ちゃん？」

「うん？ ど、どうした、春菜？」

「何か、今日の拓ちゃん元気がないね」

と言って、春菜は俺の顔を覗き込むような格好を見せた。

「そ、そうかな？」

「うん、絶対元気ない」

「何だよ、やけにきっぱりと言いつけるんだな？」

「だって、わたしには分かるんだもん」

春菜は、少し頬をプクツと膨らませていた。

別に怒っている訳ではないんだろうけど、そんな春菜の時より見せる子供っぽい仕草が、俺には凄く可愛く見えた。

「わ、分かったよ。確かに春菜の言う通り、ちよっと元気がなかつ

たかもしれないな」

「拓ちゃん、何か心配事があるの?」

どうも俺は、春菜の不安げな表情や落ち込んだ表情を見るのが苦手らしい。

ていうか嫌なんだろうな、きっと……。

少なくとも、俺の傍にいる時の春菜には、いつでも笑顔でいて欲しいって思う。

「心配事なんてないよ。何か、ちょっとした気分的なものって感じだからさ。もう、今は全然平気だ」

「本当に大丈夫なの?」

「大丈夫だって。だから、そんな顔するなよ。春菜は、いつでも笑ってる顔が一番可愛いんだからさ」

「えっ? ええっ!?!」

春菜が、何故か驚きの表情を見せていた。

「何だよ。別に俺は、おかしい事なんか言っていないだろ?」

「だ、だって、拓ちゃん……。きゅ、急にそんな事言うんだもん」

春菜は、少し赤くなつた頬を両手で覆い隠しながら、恥ずかしそうにしながらも微笑んでいた。

そんな春菜の姿を見た俺は、少しホツとしていた。

それから、俺と春菜は教室に入り各々の席に着いた。

そして、あつという間に・・・とはいかなかったが、午前の授業が終わり、今は昼休みとなって清彦と一緒に弁当を食べている。

「そういえば、拓也は温泉旅行に行くって言ってたけど、もう旅館の予約って取ってあるの？」

「旅館？ いんや、まだだけど」

「ええ！？ まだ旅館を決めてないの！？」

清彦のやつ、何をそんなに驚いているんだ？

「旅館を決めるも何も、昨日の夜にやつと温泉旅行が確定したって感じだからな」

「でもさ、一般的には明日からゴールデンウィークが始まるんだよ？ 学生である僕等は、大型連休とはいかないけど・・・。それでも、今からだとこの旅館も満室状態で、とても予約なんて取れる状況じゃないと思うよ」

「まあ、確かに清彦の言う通りだと思うけどよ。だけど、ネットで探せば一つくらいは空きがあるんじゃないかねえのか？」

「そうかもしれないけど・・・。でも拓也、温泉旅館ならどこでもいいって訳じゃないんでしょ？」

「ま、まあ、確かに・・・」

うん・・・。

最悪の場合、妹たちの要望には答えられなくなるかもしれないな。

「とりあえず、今日家に帰ったらネットで色々調べてみるよ」

「良い旅館が見つかるといいけどね」

「まあ、こればかりはどうしようもねえからな」

と清彦に言いつつも、何とか妹たちの為にしてやりたいと思った。そして昼休みが終わり、午後の授業も終わって、俺は家へと戻って来た。

【Part・29】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

家に帰って来た俺は、そのまま二階へと上がり、自分の部屋に入った。

そして、鞆を勉強机の上に置き、制服からトレーニングに着替えてベットの端に腰を下ろした。

さて、どうしたものか……。

玄関には、冬香の靴が綺麗に揃えられてあったから、隣の部屋には既に学校から帰って来ていた冬香がいるという事は分かっている。

「まいったなあ……。夏香との夜中の件は、冬香にどう話せばいいんだ？」

俺は両手で頭を抱えながら、そう呟いた。

まず、分かっている事は、俺が夏香を後ろから抱きしめてキスをしそうになったという事だけは、絶対冬香には話す事が出来ないって事だ。

もう二度と、そういった行為を夏香にはしないって、冬香と約束しちまってるからな。

となると、この事だけを伏せておいて、あとは事実をありのままに話せばいいか……。

ただし、夏香がお袋の事で、酷く寂しさを感じる時があるという事を冬香に喋ってしまったっていいのかどうなのかが、かなり気になる所ではあるのだが……。

けどなあ、これを話さないと、冬香に喋る事柄がなくなっちゃうからな。

冬香に何も話さなかったら、それはそれで何も言えないような事

を、夜中に俺の部屋で夏香と二人きりでやっていたのか？　なんて、思われちゃうからな。

まあ、実際には冬香との約束を破って、冬香に言えないような事やってしまっただけだよ……。

それに、冬香は嘘を見破る能力に長けているから（俺に対してだけかもしれないけど）、ある程度は真実を組み込まないと、すぐに嘘がばれてしまう可能性がある。

てな訳で、夏香のお袋の件だけは冬香に話すしかないよな。

とりあえずではあったが、ある程度の考えが纏まった時、俺の部屋の扉を叩く音がした。

「兄さん？……帰ってる？」

おっと、いつも家に帰って来たらすぐに、冬香の部屋に行つて声を掛けるのに、そういえば今日はまだだったんだよな。

俺は腰掛けていたベットから立ち上がって、扉を開けた。

扉を開けると、部屋姿の冬香が立っていた。

「兄さん……お帰りなさい……」

「おう、ただいまっ。ちょうど今、冬香の部屋へ行こうと思ってたんだ。とりあえず立ち話も何だから、俺の部屋で話そうか？」

「うん……」

俺は、冬香を自分の部屋へ招き入れて、勉強机の椅子に座らせた。俺の方はというと、さっきと同じくベットの端に腰を下ろした。

俺と冬香は少し距離を置いた状態で、お互いが向き合うような格好になっている。

「それじゃあ、今朝言ったように夜中に俺の部屋で夏香と何があったのか、その話をするよ」

冬香は言葉を発せず、静かに頷いた。

【Part 30】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

今、この家には俺と冬香の二人しかいない・・・ていうか、厳密に言うと俺の部屋に血の繋がった妹の冬香と二人きりって事だ。

俺はベットの端に腰を下ろし、大人しくて可愛い妹の冬香は勉強机の椅子に腰掛けているといった状態だ。

そして冬香は、目の前にいる妹が大好きな俺の瞳をじっと見つめている。

そんな冬香に無言で見つめられると、俺としては何だかとても恥ずかしく、胸の奥がドキドキして・・・て、ちがう！

普通ならそう思うところなんだが、今の状況はまったくそんな風に思えん！

確かに胸の奥はドキドキしてはいるのだが、このドキドキはまったくの別物だ！

今から話す内容に対して、冬香が一体どんな反応を見せるのか？そして、嘘がばれやしないか？という、冷や汗が止まらないといった何とも情けない緊張感のドキドキだ。

とりあえずは落ち着け、大丈夫だ。

別に全て嘘を言う訳じゃない。

ほんの少しだけ、嘘を混ぜるだけだ。

そして、俺は心の中で「大丈夫だ」を連呼した後、一度目を閉じて気持ちを落ち着かせ、冬香に夜中での夏香との出来事を話し始めた。

「深夜の二時頃だったかな、突然夏香が俺の部屋の扉を叩いて、俺にどうしても話したい事があるって言って来たんだ。だから俺は、夏香の話を聞こうと思って部屋の中へ入れてやったってな訳さ」

冬香は言葉を発せず、静かに俺の話の話を聞いている。

それから俺は、夏香が俺に話してくれた事・・・今は亡きお袋の事で、どうしようもなく寂しさを感じる時があるという事を冬香に話した。

「それで、夏香はそんな寂しい思いを俺に打ち明けた事で、気持ち少し楽になったみたいだったよ。その後は何事もなく、普通に部屋を出て行った。とまあ、こんな感じだ」

冬香は相変わらず無言のまま、表情も別に驚いた様子もなくいつもと同じだった。

と言っても、冬香はあまり感情を表に出したりしないから、実際のところ何を考えているのかが分からない。

だけど、ここまでの話の内容で、別におかしな言動はなかったはずだ。

まあ、ちょこつとだけ最後の方は嘘の内容が混じってしまっているけど・・・。

だとしても、それを冬香が嘘と見破れるはずがない。

と、断言出来るはずなのだが・・・。

な、何だ？ この言い知れぬ不安感は何？

一体、何で俺はこんなにも不安に襲われている？

そこで、俺はこの不安の原因がどこから来ているのか考えてみた。すると、ある事に気が付いた。

夜中での夏香との事の次第を話し終えた俺に対して、何故か冬香は相変わらず無言で俺の瞳を見つめたままだった。

【Part・31】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は、言い知れぬ不安の原因が冬香にあると確信した。

夏香との一件を言い終えた俺に対して、冬香が何のリアクションも示さないのはおかしい。

冬香は一体何を考えているのだろうか？ 冬香の表情を見ても、俺にはさっぱり分からない。

何にしても、この異様な沈黙は流石に耐え難いものがある。てな訳で、この状況を打開するために、俺は冬香に話題を振ってみる事にした。

「な、なあ冬香？」

「何・・・？」

な、何か、ほんの一言だけど、冬香が声を出してくれて少しホッとした気分だ。

「冬香は、夏香がお袋の事で寂しい思いをしてるって事・・・知ってたのか？」

冬香は、首を横に振ったあと・・・。

「わたし・・・全然知らなかった・・・」

と言って俯き、揃えられた足の膝の上に乗せていた自分の手を見つめていた。

俺にはそんな冬香の姿が、どことなく寂しげに感じた。

「そうか、冬香は知らなかったのか……。まあ、夏香が冬香にそういう話をしなかったのは、きっと冬香に心配をかけたくなかったからだと思うぞ。双子とは言っても、夏香は冬香のお姉さんだからな」

冬香は、一度小さく首を縦に振ったあと……。

「わかってる……」

と、言った。

「そうか、それならいいんだ」

冬香は、夏香の思いや気持ちをやんと理解してるみたいだ。流石は双子の姉妹、と言ったところかな。

「ねえ、兄さん? ……」

「お、おう、何だ?」

「兄さんと夏香が……夜中にしてた事の話って、もうお終いだ?」

「え? あ、ああ、そうだぞ。夏香との事なら、さっき冬香に話した事が全てだ。べ、別に、他には何も無いぞ」

ま、まさか、冬香は俺の事を疑っているとか!?

いやいや、いくら冬香といえども、さっきの話だけで嘘かどうかなんて分かるわけがないよな。

「兄さん?・・・」

「うん? ど、どうした、冬香?」

冬香は、俺の瞳をじっと見つめている。

冬香に見つめられるのは嬉しいけど、今はそんなに見つめないでくれ! お願いだから! 俺の良心がとても痛いんです!

それと、冬香の綺麗で澄んだ黒い瞳は、全てを見透かしてるようで、今の俺にとってはもの凄く怖いんですけど!

「兄さんは・・・」

ゴクリ・・・。

俺は、ゆっくりと唾を飲み込んだ。

俺の体は緊張が高まっているせいか、胸の鼓動も激しさを増しているといった感じだ。

冬香が一体何を言うのか? めっちゃ気になるんですけど!

「兄さんは・・・わたしに嘘をついてる」

え? え~~~~!

バ、バカな! な、何で嘘がばれたし!?

い、一体何が、ど、ど、どうなってやがんだ!?

てか、この状況って非常に不味くないか?

冬香との約束を破った事がばれたら、俺は冬香に何を言われるのか・・・?

つつか、冬香に嫌われる〜!

ああ! 一体どうすりゃいいんだ、この状況!

頼むから、だ、誰か! 誰かこのピンチを救ってくれ~~~~!

【Part・32】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

冬香に嘘をついた事がばれてしまうなんて！

ど、ど、どうしたらいいんだ！？

う、う、う……いくら考えても良い案が浮かばねえ！

とは言っても、いつまでもこのままって訳にはいかないし。

こ、ここはとりあえず、何でもいいからうまく誤魔化すしかない！

「ふ、冬香、俺が嘘をついてるだなんて、そ、そんなはずないだろ？ お、俺は嘘なんて言っていないぞ。そ、それに、な、何で嘘だなんて思うんだ？」

冬香が俺の言った事を嘘だというなら、必ず何か根拠があるはずだ。

まずは、それを聞き出さねば。

「兄さんの部屋から……夏香の声が聞こえたの……」

「え？ 俺の部屋から夏香の声が？」

「うん……」

「そ、それで、一体何て聞こえたんだ？」

冬香は、少し間を置いてから……。

「もう……いきなり何すんのよバカァ……本当にエロ兄貴なん

だから・・・もう最低・・・」

と、冬香らしい感情のない、棒読みで台詞を読むように言った。そして、その言葉を聞いた俺はというと・・・。

「つぎや〜〜!」と、心の中で大声を上げて叫んでいた。

「こ、こ、こ、こ、これはまずい!

ま、ま、ま、ま、まさか夏香のあの言葉を聞かれていたなんて! ど、ど、ど、ど、どうすりゃいいんだよ、おいっ!

俺は冬香の目を直視する事が出来ずに俯いたまま、冷や汗を大量にかいていた。

「ねえ、兄さん?・・・」

「ひゃ、ひゃいつ!」

げ! 突然、冬香に声を掛けられて、焦って変な声になっちまった!

これじゃあ、動揺してんのがバレバレじゃねえか!

「何で夏香が・・・兄さんの部屋であんな事を言ったのか?・・・兄さん、答えて」

「あつ・・・。そ、それは・・・。え、えつと・・・」

ど、どしよう・・・。

冬香に何て言えばいいんだ?

誤魔化そうにも、これ以上は・・・。

「兄さん・・・正直に答えて・・・。そうじゃないと・・・わたしは兄さんの事を・・・嫌いになる・・・」

も、もうダメだ。

ここまで来たら、冬香に真実を話すしかない……。嘘をついて冬香に嫌われるより、正直に話して嫌われた方が気持ち的に納得いくからな。

俺は、俺の事を真っ直ぐに見つめている冬香の瞳を見ながら、夜中であつた夏香との出来事をありのままに話し始めた。

そして、冬香に全てを話し終えた俺は……。

「ごめんな、冬香。前に交わした冬香との約束、俺は破つちまった。本当にごめん……」

と、俺は冬香に対して謝る事しか出来なかつた。

【Part・33】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺が冬香に謝ったあと、冬香は何も言わずに黙って窓の外を見つめていた。

俺はそんな寂しげな冬香の姿を見ていて、罪悪感に胸が締め付けられる思いがした。

冬香・・・嘘をついて、ごめん・・・。

それから・・・約束を破って、ごめんな・・・。

俺は心の中で、もう一度冬香に謝った。

「冬香は、俺の事・・・。許してはくれないよな・・・。」

俺は俯きながら、独り言のように呟いた。

「兄さんが夏香を抱きしめた時・・・。夏香は・・・嫌がらなかったんでしょ？」

窓の外を見つめていた冬香は、その視線を俺の顔に移してそう言った。

そんな冬香の言葉に対して、俺も床に向けていた視線を冬香の顔へと移し答える。

「あ、ああ。夏香の寂しそうな背中を見ていたら、何だか急に夏香を抱きしめたくなくなっちゃって・・・。それで、突然後ろから夏香を抱きしめてしまったんだ。その時、俺は夏香に殴られる事を覚悟していたんだけど、でも夏香のやつは・・・。」

俺は一旦、言葉を切ってから

「夏香は、今はこのままでいいって言ってくれたんだ」

「そういう事なら・・・夏香が怒ってないなら・・・わたしも別に何も言う事はないよ・・・」

「そ、そうか。それなら、冬香は俺の事を許してくれるのか？ 嫌いにならないでいてくれるのか？」

冬香は、また視線を窓の外に向けた。

「だけど・・・」

と、一言。

そう言った後、俺の顔に視線を戻し・・・。

「わたしに嘘をついた事と・・・夏香にキスをしようとした事は許せない・・・」

と、強い眼差しを俺に向けながら言った。

俺は、全ての事を冬香が許してくれるんじゃないかと淡い期待を抱いていたんだが、現実・・・冬香はそんなに甘くはなかったみたいだ。

「俺は冬香を裏切ってしまったのだから、冬香が俺の事を許せないというのは分かる。分かっているんだ・・・。でも、それでも、俺は・・・」

俺は床を見つめながらそう言って、一旦言葉を切った。

そして、そのまま更に言葉を続けた。

「俺は、どうしても冬香に許して欲しい……。俺にとっては大切で大好きな妹の冬香だから、俺を嫌いにならないで欲しい……。都合の良い事を言っているのは分かってる。だけど、もし……」

俺は床に向けていた視線を冬香の顔に移して……。

「もし、冬香が俺を許してくれる方法があるなら、それを俺に教えて欲しいんだ。冬香が許してくれるのなら、俺は冬香のために何でもする。何でもしてみせる！　だ、だから……」

冬香は、黙って俺の話聞いていた。

そして、ゆっくりと冬香の口が開く……。

「それなら……。兄さんが……。わたしのお願いを聞いてくれたら……。許しても良いよ」

と、言ってくれた。

【Part・34】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

冬香の願いを聞いてあげれば、俺は冬香に許してもらえる。

これは、何が何でも願いを聞いて叶えなければ！

「分かったよ。冬香が俺の事を許してくれるというなら、俺は何でもするよ。冬香の願いは、必ず俺が叶えてやるさ。だから、冬香の願いを是非聞かせてくれないか？」

「うん・・・わかった・・・」

さて、冬香の願いとは何なんだろう？

まさか、どうやっても俺では叶えられない事とかじゃないよな？

うーん、まあ冬香の事だから現実的に無理な願いは言わないと思うけど・・・。

夏香だったら、無理でもやれって言いそうだけどな。

「わたしの願いは・・・」

な、な、何だか分からないけど胸がドキドキしてきやがった。

俺は緊張した状態で、冬香の次の言葉を待った。

「兄さんに・・・して欲しいの・・・」

「え？ 俺にして欲しい・・・って？」

冬香は俯いたままで、何故か俺と目を合わせようとしない。

俺にして欲しい事？

冬香は、一体俺に何をして欲しいんだ？

「兄さんが・・・夏香にした事と同じ事を・・・わたしにもして欲しいの・・・」

「え？ 夏香にした事と同じ事？ それってもしかして、夜中に俺が夏香を後ろから抱きしめてしまった事って事か？」

「・・・うん」

冬香は相変わらず俯いたままで、そう言った。

「い、いや、俺は別に構わないけどさ。冬香は、それでいいのか？
それで、俺を許してくれるのか？」

「うん・・・」

「そ、そうか。冬香の願いがそういう事なら、俺はその願いを叶えてやるだけだからな」

冬香の願いがちよっと意外なものだったから一瞬ビックリしたけど、どんな事でも願いは願いだからな。

俺はただ、その願いを叶えてやるだけさ。

そして、俺はベットのの上に浅めに腰掛けていた状態から深めに座り直した。

「そ、それじゃあ・・・。冬香、ここに座ってくれるか？」

そう言って、俺は自分の股の間に出来た小さなスペースを指差し

た。

冬香は何も言わずに頷いて、勉強机の椅子から立ち上がった。それから、ゆっくりとした足取りで俺の目の前まで来ると後ろ向きになって、俺が指差した所にちよこんと座った。

今、俺の目の前には冬香の背中が・・・冬香の長く綺麗な黒髪が俺の体に触れていた。

そして、俺の腕は冬香の華奢な体をやさしく包み込んだ。

【Part・35】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

冬香の願い通り、俺は冬香を後ろからやさしく抱きしめた。

本当にこれでいいのか？

本当にこんな事で、冬香は俺を許してくれるのだろうか？

冬香が、一体何を考えているのか？ 俺にはさっぱり分からない。

冬香は何を思い、何故こんな願いを望んだのだろうか？

俺は頭の中でいくら考えても、一向に答えは出て来なかった。

俺としては、大好きな妹である冬香を文句を言われる事なく抱きしめていられるのだから幸運というか幸福というか、まあ要するにめっちゃ嬉しいって感じなのだが。

冬香の方は、どう思っているのだろうか？

俺と同じ気持ちなんだろうか？

いやいや、いくら何でもそれは都合良く考え過ぎか……。

「兄さん……？」

「えっ？ あっ、ど、どうしたんだ冬香？」

突然、冬香に声を掛けられて一瞬思考が飛んじまった。

「もう少し……強く抱きしめてもいいよ……」

「あっ、そ、そうか。なら、もう少し力を入れるぞ」

「うん……」

俺は冬香を抱きしめてる腕に、少し力を入れた。

夏香の時とは違って冬香の華奢な体は、あまり力強く抱きしめてしまつと、何だかあっけなく壊れてしまうような、そんな感じがした。

「このくらいで、いいのか？」

「うん・・・」

それから暫く、俺は冬香を抱きしめ続けた。

冬香は相変わらず何も喋らずに、俺の成すがままつて感じた。

そういえば夏香の時は抱きしめた後、思わずキスをしそうになつちまつたな。

もし、俺が冬香にキスをしそうになつたら、夏香と同じく怒るだろうか？ って、そりゃ怒るだろうなあ・・・。

だがしかし、冬香は言ったよな「夏香にした事と同じ事をして欲しい」って。

という事は、俺が冬香にキスを迫ってもいいって事じゃないか！
よくよく考えたら、こんなチャンスは滅多にないぞ！

冬香にキスを迫ってもいいんだって思ったら、何だかもの凄く緊張してきた。

や、やべー、胸がめっちゃドキドキしてやがる。

俺の胸は冬香の背中に密着してる状態だから、この俺の緊張での胸の高鳴りが冬香にも伝わってしまったてるんじゃないだろうか？

まあ、俺の緊張が伝わりうが伝わらなからうが、やる事は変わらないけどさ。

このまま、もう暫く冬香を抱きしめていたいけど、夏香が突然帰つて来るって事もあり得るからな。

ここは男らしく腹を決めて、実行に移すべし！

【Part 36】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

まさか一日も経たないうちに、二人の妹に対して同じ行為をするはめになるなんて・・・。

夜中に夏香を抱きしめ、そして今は窓から夕日が差し込み、オレンジ色に染まった部屋の中で冬香を後ろから抱きしめている。

妹が大好きな俺にとっては、これ以上ない幸せな状況だ。

だけど、悲しいかな人間というのは、どこまでも欲の尽きない生き物。

そして、俺も例外ではなく、そんな人間の一人だ。

という訳で夏香の時と同じく、冬香にもキスをしたい・・・ていうか、するつもりだからな。

俺は一度大きく息を吸って、高鳴る気持ちを落ち着かせた。

そして、冬香とのキスを成し遂げるため、行動に移す。

俺は、冬香を抱きしめていた腕を一旦解き、そして左手は冬香の左の二の腕を握り、右手は冬香の左腕の肘のあたりを掴んだ。

そうして、冬香の上半身を時計回りに少し捻りながら左側へ少し傾けた。

形的には、冬香の上半身だけをお姫様抱っこしてるような感じになっっている。

冬香をずっと後ろから抱きしめていたため、抱きしめている間は可愛い冬香の顔を見る事が出来なかったが、これでやっと抱きしめながらに冬香の顔を見る事が出来る。

それから、俺は冬香の黒く綺麗な瞳を見つめながら、冬香の顔色を窺ってみたのだが、冬香は別に驚いた様子もなく、いつもと変わらず感情の掴めない表情をしていた。

「なあ、冬香？」

冬香は無言のまま、ただ俺の目を見つめている。

「冬香は、俺に言ったよな？ 夏香と同じ事をして欲しいって？」

冬香は何も言わずに、小さく首を縦に振った。

「だから、俺はその通りにやろうと思ってる。夏香にしたように、俺は冬香にも同じ事をしようよ……いや、俺自身が冬香にそうしたいと思っている」

冬香は目を逸らさず、じっと俺の言葉を聞いている。

「俺が今から、冬香に何をしようとしてるのか？ 冬香には、もう分かっているよな？」

冬香はさつきと同じように、ただ首を小さく縦に振るだけだった。やはり冬香には、今から俺が冬香に対してやろうとしている事が分かっているようだ。

だとしたら、冬香は分かっているながらも、今も俺に対して嫌な素振りを見せていないというのは……。

実は冬香も、俺にキスされる事を望んでいる？

そうなのか？ い、いや、まさかな……。

で、でも、もしかしたら……って、こんな時に何を悩んでやがるんだ俺は！

冬香が何をどう思っているようが、今の俺には関係のない事だ。

今から俺がやる事は、ただ一つ。

冬香との初キスなのだから！

【Part・37】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

「そ、それじゃあ、今から……。冬香にキ、キスをするからな」

俺がそう言うと、冬香は黙って小さく頷き、そしてゆっくりと瞼を閉じた。

よ、よし、い、今からやるぞ！

ていうか、めっちゃ緊張するー！

おおおおおおおお、お、落ち着け俺！

「スウー、ハアー、スウー、ハアー」

俺は天井を見上げながら、大きく深呼吸して逸^{はや}る気持ちを落ち着かせた。

そして冬香の顔へ視線を移し、冬香の可愛い唇を見ながら、俺は少しずつ自分の顔を冬香の顔へと近づけていった。

冬香の唇と俺の唇との距離が徐々に縮まる。

そして、あとほんのちよつと……。

唇を尖らせれば、俺の唇が冬香の唇に触れるという所まで来た時、何故か俺は冬香にキスする事を躊躇^{ためら}った。

いや、躊躇^{ためら}ったというより、完全にキスする事が出来なくなっていた。

何故、ここまで来て？

どうして、今になって？

冬香とのキスは、俺自身が望んでいた事ではなかったのか？

俺は自分自身に疑問を投げかけたが、その答えは何一つ出ては来なかった。

俺は冬香とのキスを諦め、間近に見える冬香の顔から、自分の顔を遠ざけた。

俺が顔を遠ざけた事で冬香は何かを感じ取ったのか、閉じていた瞼をゆっくりと開いた。

「あつ、いや、ほらっ、冬香はさ。冬香は、夏香と同じ事をして欲しいって言っただろ？ だ、だからさ、冬香にキスをしちゃったら同じ事にならなくなっちゃうからさ」

「・・・っん」

「一応、夏香との件は、これで許してもらえるのかな？」

「うん・・・」

冬香はそう言って小さく頷いたあと、ゆっくりと立ち上がった。そして、扉の方へと歩いて行く。

「なあ、冬香？」

「・・・何？」

「もし・・・。もし、あのまま俺が冬香に・・・。あつ、いや、やっぱいいや。それより、冬香は夏香のようにお袋の事で寂しくなったりはしないのか？」

「わたしは大丈夫・・・。わたしには・・・夏香がいるから・・・。それに・・・いつもわたしの傍には・・・兄さんがいてくれるから・・・」

「あ、そ、そつか。いや、それならいいんだ。だけど、どうしようもなく寂しくなったり、悲しくなった時は俺に言っただぞ。その時は、この俺が全力で励ましてやるからな」

「うん・・・わかった・・・」

冬香はそう言ったあと、扉を開けて部屋を出て行った。

あのまま冬香とキスをしていたら、冬香はどう思ったんだろうか？
それとも、俺が最後までしないという事を冬香は分かっていたんだろうか？

さつきは、それを冬香に聞こうと思っただけど、何か聞く事が出来なかつたな。

ああ〜！ それにしても！ 何てもつたいない事を俺はやつちまっただんだ！

せつかく、冬香とキスが出来るチャンスだったのに〜〜！
何で、出来なかつただんだよ！？

自分で自分の事が分からないって、俺って実は本当にバカなんじゃないか？

少し前の俺なら、絶対にキスしてたような気がするんだが・・・
自分の中で、何か心境の変化でもあったって事なのか？

はあ・・・。
いくら考えても、さっぱり分からねえ。

まあ、考えても分からないんだから、これ以上答えの出ない事で悩んでてもしょうがないよな。

とりあえず、今は考えるのをやめておこつ。

【Part・38】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

冬香とキスが出来るという絶好のチャンスを逃してしまった俺は、冬香が部屋を出て行ってから暫くの間、ベットの上で落ち込んでいた。

「そういえば、今何時だ？」

俺は、ベットの脇に置かれた目覚まし時計を手に取って見てみた。

「ああ、そうか。もうすぐ、夏香が部活の練習を終えて学校から帰って来る時間か」

いつまでも落ち込んでいる訳にもいかず、俺はめっちゃ落胆しながらも風呂を沸かして晩飯の準備をした。

その後、学校から帰って来て風呂から上がった夏香と部屋で小説を読んでいた冬香をリビングに呼んで、三人一緒に晩飯を食べた。

夏香は、朝の俺に対するぎこちなかった態度が嘘のようにいつもと同じ感じで、冬香も今日は何事もなかったかのような至って普通の感じだった。

そして、飯を食べ終わった夏香と冬香は、二人一緒に自分たちの部屋へと戻って行った。

俺も食べ終わった食器を片付けた後、自分の部屋に戻って勉強機の椅子に座り、机の上に置かれたノートパソコンを開いた。

「さて、気持ちを切り替えて、夏香と冬香の要望にあった温泉旅館を探さないとな。とりあえず、ネットで調べてみるとするか」

俺はその後二時間かけて色々調べたのだが、妹たちの要望に叶った旅館はどこも予約で一杯だった。

「やべ〜、やっぱり旅館を決めるのが遅かったか。でもなあ、何とか可愛い妹たちの願いを叶えてやりたいなあ・・・」

とりあえず、諦めるにはまだ早いか・・・。
もう少し、ネットで調べてみよう。

俺は一旦風呂に入ってから気分を変えて、もう一度ネットで調べる事にした。

それから、三時間が経過し・・・。

「ああ〜！ 見つかんねえ！ やっぱし、どこも予約で一杯じゃんかあ〜！」

こうなったら、どこでもいいから妥協して決めるしかないか。
いや、しかし・・・。

可愛い妹の夏香と冬香のためだ、何としてもこの俺が見つけ出してみせるさ！

「うおおおりゃあああ〜！」

と、勢い込んで探してはみたものの・・・。
結局、お目当ての旅館が見つからないまま朝になってしまった。

「これだけ探しても見つからないって・・・」

最悪だ・・・。

一睡もしてない・・・。

めっちゃ眠いんですけど・・・。

「と、とりあえず、旅館探しは学校から帰って来てから、もう一度やってみる事にしよう」

えっと、今はまず夏香の弁当を・・・。

「ああ、そうか。今日は土曜日で、中学生の夏香と冬香は学校が休みだったな。それと、夏香は部活の練習が午後からって言ってたし。弁当は作らなくてよかつたんだよな」

それじゃあ、朝飯の用意だけしておいて学校へ行くとするか

【Part・39】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は一人で朝食を済ませ、妹たちに取り分けたおかずはラップをかけて冷蔵庫に入れた。

夏香と冬香が起きてくれば、勝手に冷蔵庫を開けて適当に食べてくれるだろう。

「さうて、春菜が迎えに来るまで、少しだけでも眠るとするかな」

俺は自分の部屋に戻り、ベッドの上で横になった。

それから暫くして、いつものように春菜が迎えに来た。

そして俺と春菜は、横に並んでバス停へと向かう。

「ねえ、拓ちゃん？ 大丈夫？」

春菜が不安気な表情をして、俺の顔を覗き込んだ。

「え？ 大丈夫って、何が？」

「何がって……。もしかして、拓ちゃん昨日は一睡もしてないでしょ？」

「うわっ、何で寝てないってのが分かったんだ？」

「だって……。拓ちゃん、目の下に凄いくまが出来てるんだもん」

「ええ！ マジでか！？ あちゃー、何かみつともねえなあ」

「拓ちゃん、何で寝てないの？ 何か、寝られない事情でもあったの？」

「いや、事情っていうか……」

まったく、本当に心配性だよなあ、春菜は。

「実は、妹たちの要望に叶う温泉旅館を昨日の夜からネットで探していたんだよ。まあ、結局朝になっても見つからなかったけどな」

「そうだったんだあ……。今日からゴールデンウィークに入ってるから、旅館はどこも予約で一杯だよな」

「まあな……。でも、結局俺の考えが甘かったって事なんだよな……」

「拓ちゃん……」

「だけど、折角の妹たちの頼みだし。学校から戻ったら、もう少し頑張ってみるつもりさ」

「うんつ。拓ちゃんが諦めなければ、絶対良い旅館が見つかると思うよ。それにわたしも家に戻ったら、旅館探しを手伝うからね。だから、一緒に頑張ろうねっ」

春菜は両脇を閉じて肘をたたみ、胸の前で両拳を作って頑張ろうのポーズを決めていた。

そんな春菜の姿が、何だか可愛くて凄く癒される気がした。

「おう。ありがとな、春菜」

「うんっ」

春菜はそう言って、いつもの屈託のない笑顔を俺に見せてくれた。

【Part・40】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・40】

俺と春菜は学校に到着して教室に入り、それぞれの席に着いた。

「おはよう、拓也」

前の席にいる清彦が後ろを向いて、いつものように朝の挨拶をしてきた。

俺もいつものように、「おはよう」と挨拶を返す。

「ねえ、拓也？ 目の下に凄いくまが出来てるんだけど、一体どうしたの？」

「ああ、これか。いや、実はさ・・・」

俺は清彦に、春菜の時と同じく寝ずに朝まで温泉旅館をネットで探していた事を話した。

「なるほどね。それは、拓也も大変だね」

「まあな。だけど、可愛い妹たちの為だから一日や二日寝なくなつてへっっちゃらさ」

「可愛い妹たちの為・・・かあ。まあ、拓也が妹好きになる気持ちも分からなくはないけどね」

「な、何だよ、突然」

清彦のやつ、この前俺が妹好きって言った時は異常とかって言うてたよな？

「だってさ。拓也の妹って、あの夏香ちゃんと冬香ちゃんだものね。二人とも、すつごく可愛いじゃない」

「ま、まあ、確かに夏香と冬香は可愛いけどな。だけど、前に俺が妹好きって言ったら、清彦は異常って言うてたじゃねえか」

「ああ、それはね。拓也の幼馴染みである春菜ちゃんより、妹の方がいいって言ったからさ」

「ああ、確かにそう言ったな。でも何で、それが異常って事になんだよ？」

清彦は腕を組んで、何やら考え込んでいる。

それから少しして、口を開いた。

「それはね……。きつとこの先、拓也にも分かる時が来るよ。だから、これはその時までの宿題だね」

「何だよ、それ。全然意味分かんねえよ」

「まあまあ、いいからいいから。あつ、先生が来ちゃったね。それじゃあ拓也、また休み時間に」

そう言って、清彦は前に向き直した。

清彦の言った意味が分からないまま、今日一日の学校生活が始まった。

今日は土曜日という事で、学校は午前中で終わりだ。そして、今はすでに放課後となっている。

俺が鞆の中へ教科書やノートを入れて帰り支度をしていると、佐伯と春菜が俺の方へ向かって来るのが見えた。

「御堂、春菜から話しは聞いたわよ。妹さんの為に寝ないで温泉旅館を探しているんでしょ？」

「ああ、そうだけど。もしかして、佐伯も手伝ってくれるのか？」

「違うわよ」

「は？ 違うのかよ！？ じゃあ、一体何なんだよ？」

佐伯が制服のポケットから、何やら一枚の何かのチケットのような紙を取り出した。

「これ、あなたにあげるから」

そう言って、佐伯は取り出した紙を俺に差し出した。

「何だよ、これ？」

俺は、佐伯が差し出した紙を手に取って見てみた。
ん？ 温泉旅館の豪華荘！？

「こ、これ、温泉旅館の宿泊券じゃねえか！？」

「そつよ。この前、商店街の福引をやった時にあたしが当てたもの」

「佐伯、いいのかよ？ 俺がもらっちゃって」

「いいわよ。その宿泊券は、この前あたしの勘違いで、あんたを殴ってしまつたお詫びとしてあげる物だから。それに、その旅館ならあんたの妹さんたちの要望も叶えられるんじゃない？」

「え？ マジでか!？」

もう一度、手に取つた宿泊券を見てみると大きなホテルのような建物の旅館が写っていて、その下の方には『旬の食材を使った豪華な料理と日本最大を誇る露天風呂!』と書かれてあつた。

「佐伯、サンキュ・な！ これなら、十分妹たちの要望に応えられるよ!」

「礼なんかいいわよ。それより、折角の豪華温泉旅館の宿泊券なんだから、しっかりと妹さんたちを楽しませてあげるのよ」

「おう！ 分かってるって!」

「拓ちゃん、良かったね」

「拓也、良かったじゃん」

「ああ。これで、妹たちをガツカリさせないで済むよ」

よっしゃー！ 可愛い妹たちとの温泉旅行、絶対満喫してやるぜ！

【Part・40】(後書き)

【Part・20】での佐伯優子の話し方が登場シーンでの話し方と違っていたので修正させて頂きました(^^;) ;

【Part・41】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・41】

学校から家に戻って来た俺は、温泉旅館が決まった事を伝えるため急いで妹たちの部屋に向かった。

「おゝい、夏香、冬香、入るぞ」

俺は大きな声で呼び掛けたあと、部屋の扉を開けて中へと入ろうとした……の、だが!?

「ちよつと！ 急に開けるなバカア！」

と、夏香が突然怒声を上げたと思ったら、いきなり俺の頬をグーで殴りやがった。

俺は、突然の事でビックリしたのと咄嗟に少し後ろへ避ける格好になったため、夏香に殴られた瞬間に足元のバランスを崩して床に尻餅を付いちゃった。

「いててて……」

夏香は俺を殴ったあと、バタンツ！と勢い良く扉を閉めた。

え？ 何でいきなり殴られたのだった？

まあ、タイミング悪く夏香の着替え中に部屋の扉を開けちゃったって事なんだけど。

でもなあ、たまたま着替え中に部屋の扉を開けたからって、いきなり殴る事はないよなあ……。

そんな夏香の行動が理不尽過ぎやしないかと、溜息をつきながら

思っていると目の前の扉が勢いよく開き、学校指定のジャージに着替え終わった夏香がスポーツバッグを持って部屋から出て来た。

「あたし、これから部活の練習があるから」

「お、おう、そうか」

「今度、またあたしの着替えを覗いたら、殺すからね」

「い、いや、ちょっと待て、俺は別に……」

「じゃあ、行って来るから」

「お、おいつ、夏香っ！……て、行つちまいやがった」

まったく、別に夏香の着替えを覗こうと思っていた訳じゃないんだが……。

まあ、でも夏香の下着姿が見られたのは少し嬉しいかも……じゃ、なーい！俺はただ変態なんだよ！

……て、自分で言つてて空し過ぎるなコレは。

ま、まあ、とりあえず、夏香が学校から戻って来たら、ちゃんと誤解を解いておく事にしよう。

それから、俺は気を取り直して床から立ち上がり、再び夏香と冬香の部屋の扉を開けた。

部屋の中に入ると、勉強机に座って本を読んでいた冬香がこちらを向いて心配そうな顔をしていた。

「兄さん、お帰りなさい……。顔、大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫、大丈夫、夏香に殴られるのはいつもの事だし。」

別に心配しなくても、俺は全然平気だぞ」

正直言つと、夏香に殴られた頬はヒリヒリと痛むけど。

「そう・・・それならいいけど・・・」

「ところで、冬香？」

「何・・・？」

「この前、ゴールデンウィークに温泉へ行こうって話をしただろ？」

「うん・・・それがどうしたの？」

「いや、実はさ」

俺はポケットの中から、佐伯に貰った一枚のチケットを取り出した。

「それは・・・何？」

「ああ、これは温泉旅館の宿泊券さ。今日、学校で佐伯のやつから貰ったんだ」

「佐伯さんって・・・春菜さんの友達なの？」

「ああ、その佐伯だ。学校であいつとちょっとしたトラブルがあったて、その時のお礼なんだと」

「そう・・・。でも・・・トラブルって、何があったの？」

「え？ あ、ああ。ま、まあ、ほんの些細な事だよ。ちょっとした佐伯の勘違いってやつさ」

朝、俺が春菜を抱きしめたと勘違いして・・・なんて事は、冬香には言えないな。

鋭い冬香の事だから、色々突っ込まれるとボロが出そうだし。まあ、実際は春菜を抱きしめていないし、冗談で言ったただけからバレても問題はないと思うのだが・・・。

「そうなんだ・・・」

一応、冬香はこれで納得してくれたみたいだ。変に突っ込まれないで良かった。

「その宿泊券・・・見てもいい？」

「お、おう、別に構わないぞ」

俺は、冬香に宿泊券を手渡した。

冬香は宿泊券を両手で掴んで、時より裏返しにしたりしながら表と裏を交互に見ていた。

「凄く・・・良さそうな旅館・・・」

そう言って、冬香は宿泊券を俺に返した。

「そうだろ？ これは、佐伯に感謝しないとな」

「うん・・・」

冬香も、ここの旅館が気に入ってくれたみたいだ。
良かった良かった。

「それじゃあ、晩飯の時にまた呼びに来るからな」

「うん・・・」

それから俺は夏香と冬香の部屋を出たあと、自分の部屋へと戻った。

【Part・41】（後書き）

前回の投稿から1ヶ月近く経ってからの更新になってしまい、大変
申し訳ありませんm(_____)m
作者の都合上、これから更新が非常に遅れる事があるとは思いま
すが、それでもこの作品を読み続けて頂けたら嬉しいです^^

【Part・42】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・42】

「あれ？ そっいえば・・・」

俺は自分の部屋へ戻りかけてから、もう一度夏香と冬香の部屋に入った。

当然、部屋の中へ入る前に声はかけているぞ。

部屋に入ると、さっきと同じく冬香が勉強机に座って本を読んでいた。

「なあ、冬香？」

「どうしたの・・・？」

「いや、さっき晩飯って言ったけど、昼飯はもう食べたのか？」

「うん・・・。夏香と二人で、冷凍食品を温めて食べたよ・・・」

「あ、そうか。いや、それならいいんだ。読書中のところ、何度も済まなかったな」

「うん・・・別に平気・・・」

「それじゃあ、晩飯の時にまた呼びに来るから」

「うん・・・」

そして、夏香と冬香の部屋を出た俺は今度こそ自分の部屋へと戻り、学校の制服からトレーナーに着替えて一息ついた。

俺はベットの上で横になりながら、佐伯に貰った温泉旅館の宿泊券を手にとって眺めていた。

「佐伯に殴られた時は、不幸としか言いようがなかったけど、こうして温泉旅館の宿泊券が頂けたなら悪くはなかったかな」

夏香、冬香、絶対楽しい温泉旅行にしてやるからな！

俺は心の中で強く誓った。

それから三十分程ベットで横になったあと、リビングで一人寂しく昼飯を食べた。

その後は、一階の各部屋の掃除と洗濯をやり終えてから、再び自分の部屋へと戻って来た。

「夏香が帰って来るまでには・・・うん、まだ時間があるな」

俺は勉強机に座り、ノートパソコンを開いた。

そして、パソコンの電源を入れる。

本来なら、徹夜して朝まで温泉旅館を探していたから今は眠くて仕方ないはずなんだけど、佐伯に貰った温泉旅館の宿泊券のおかげで嬉しさのあまり眠気がふっ飛びしまった。

てな訳で・・・。

「さて、今日はどんなギャルゲーをやるかな・・・」

勉強机の引き出しの中に、まだ攻略していないギャルゲーが数本入っている。

まあ、棚の中にも全く手を付けていないゲームが置いてあるから、実際に攻略してないゲームは十数本あるのだが・・・。

とりあえずは、引き出しの中に入れてある攻略途中のギャルゲーを終わらせないとな。

「えっと……。どれにしようかな？」

俺は、所狭しと引き出しの中に入っているギャルゲーを一つ一つ手に取ってみる。

「よし、今日はこれにするか」

『告白〜この想い、君に届け〜』とタイトルが書かれたパッケージからディスクを取り出して、パソコンのドライブに入れた。

このゲームは、何て言っても妹キャラの亜美ちゃんが凄く可愛いくて、しかも「お兄ちゃん」と呼んでくれるところが更にグッド。

「よし！ 今日こそは、必ず亜美ちゃんを攻略してやるぞ！」

と、何だかんだで思わずゲームに夢中になってしまい、いつの間にか日も暮れて夏香が部活を終えて家に帰って来た事にも気が付かず、「風呂が沸いてない！」だの「エッチなゲームばっかしてんな！」だのと突然俺の部屋に入って来た夏香に散々罵られてしまった。夏香のやつ、エッチなゲームって……。

「このゲームは、全年齢対象なんだよ！」

て、言ってやりたかったけど……。夏香の前で言える程度胸のな
い俺は、心の中だけに留めておいた。

我ながら、何とも情けない……。トホホ。

【Part・43】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺はさっきまでやっていた『告白〜この想い、君に届け〜』のギヤルゲーを終了して、パソコンの電源を切った。

妹キャラの亜美ちゃんをまだ攻略出来ていない為めっちゃ名残惜しいのだが、今はそれよりも早急にやるべき事がある。

早いとこ風呂を沸かして、晩飯の支度をせねば！ そうしないと、また夏香に罵倒される！

まあ、最近は夏香に殴られたり罵倒されたりする事にも慣れてきて、いつの間にか苦痛を通り越して逆に快感を覚えつつ……って！ そうじゃない！！

俺は決してDMじゃねえし！ 変態でもない！ ……と思いたい。

「はあ……」

俺は一つ、小さな溜息をついた。

「さっさと下に降りて、急いで用事を済ませよう」

そうして、一階に降りた俺は風呂を沸かし、晩飯の準備に取り掛かった。

それから三十分が経過し、風呂の準備と晩飯の支度がほぼ同時に終わった。

俺はその事を伝える為に二階へと上がり、夏香と冬香の部屋へと向かった。

「お〜い、夏香〜、冬香〜、入るぞ〜。入ってもいいか〜？」

と、俺は扉の前で大きな声で呼び掛けた。

「入っていいわよ」

部屋の中から夏香のお許しの声が聞こえたので、俺は気兼ねなく扉を開けて中へと入った。

部屋に入ると、夏香が勉強机に座って何やら一生懸命ノートを書き写していた。

多分、冬香がやり終えた宿題のノートを書き写してでもいるんだろう。

「何？ 晩御飯が出来たの？」

「ああ、晩飯の支度が出来た。それと、風呂の方も沸いたから、いつでも入れるぞ」

「あつ、そう。そしたら、あたしは先にお風呂に入るから」

「そうか。じゃあ、晩飯は夏香が風呂から上がってからにしよう」

「あたしに構わず、先に食べててもいいけど？」

「いや、晩飯くらいは三人一緒に食べようぜ」

「まあ、兄貴がそう言うのなら、あたしは別に構わないけど」

「なら、そう言う事で」

「はいはい」

そういえば、部屋に入るといつも勉強机に座って本を読んでいる冬香の姿がなかったな。

「なあ、夏香？ 冬香はどこに行ったんだ？」

「え？ 冬香？ 冬香ならそこにいるよ」

夏香はそう言って、ベッドの方を指差した。

二段ベッドの下の段を見てみると、部屋着姿の冬香が気持ち良さそうに眠っていた。

なるほど、夏香が部活を終えてもうすぐ帰って来るって、今日は知らせてくれなかったと思ったたらそういう事だったのか。

「あたしが帰って来た時には、冬香はもう寝てたよ」

「そうか。きつと、長い時間本を読んでいるうちに疲れて眠っちゃまったんだろ。まあ、今起こすのも可愛そうだから、晩飯を食べる時にでも起こしてやる」

「そうね。それじゃあ、あたしがお風呂から出たら冬香を起こしておくね」

「そうだな。それじゃあ、よろしく」

「オツケ」

夏香と冬香の部屋を出た俺は、一階に降りてリビングに入り、晩飯のおかずをラップをかけてから自分の部屋へと戻った。

【Part・44】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

風呂から上がった夏香と、そして夏香に起こされまだ眠そうにしている冬香と、今は三人でテーブルの上に並べられた晩飯を食べているところだ。

「ねえ、兄貴？」

「おお、何だ？」

「さつき冬香から、何か凄い温泉旅館に泊れるって話を聞いたんだけど？」

「ああ、そっか。夏香には、まだ話をしてなかったな。実は今日、佐伯から温泉旅館の宿泊券を買ったんだよ」

「へえ、そうなんだ？」

夏香は箸を持った腕を休める事なく、俺の話を聞いている。

何だか旅館の話よりも、晩飯の方に興味があるって感じなんだが。

「ああ。佐伯の勘違いで俺に迷惑をかけたから、そのお礼ってな」

「ふん。それで、その旅館ってどんな感じなの？」

「宿泊券に旅館の建物が写っていたけど、何だかホテルみたいな大きな旅館って感じだったぞ」

「それから……。旬の食材を使った豪華な料理と……。日本最大を誇る露天風呂……。って、書いてあった……」

冬香が、夏香の興味をそそるであろう一言を付け加えてくれた。

「えっ？ そうなの!？」

案の定、夏香が今まで休める事なく動かし続けていた箸がピタッと止まった。

やっと、この話しに興味が持てたみたいだな。

「冬香が、今言った事は本当だ。ちゃんと、宿泊券にそう書いてあったからな」

夏香の瞳が、何だかキラキラと輝き出したような。

「旬の食材を使った豪華な料理か……。一体、どんな料理なんだろう……。?」

夏香が上を見上げながら、何だか妄想に浸りだしたみたいだ。

まあ、まだ見ぬ豪華な料理の妄想に浸るのは夏香の勝手だが、今は目の前にある物を食べてくれないと、折角作った俺の料理が冷めちまう。

「おい、夏香？ 早く食べないと飯が冷めて不味くなるぞ」

「あっ、そうだった。ごめん、今食べるね」

夏香は無事に、妄想の世界から戻って来れたみたいで良かった良

かった。

そして、晩飯を食い終わった俺たちはそれぞれの部屋へと戻った。

【Part・45】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は部屋に入ると、そのままベットの上で横になった。

そして、ベットに横になると急にウトウトと眠気が襲ってきて、そのまま危うく深い眠りに入りそうになったところで、勉強机の上に置いてあった携帯が鳴り響いた。

「誰からだ？」

俺はベットから起き上がると、両手を思いっきり上に伸ばして眠気を強引に吹き飛ばした。

そして、携帯を手に取り開いてみると、如月春菜という名前が画面に表示されていた。

何だ、春菜からじゃねえか。

「もしもし」

「もしもし、拓ちゃん？」

「おう、俺だけど？ 春菜、どうした？」

「あつ、あのね。拓ちゃん、今日学校で優子ちゃんから温泉旅館の宿泊券を貰ったでしょ？」

「ああ。その宿泊券なら、今俺の目の前にあるけど、それがどうかしたのか？」

「拓ちゃん、気付いてるのかもしれないけど、その宿泊券一枚で五人まで旅館に泊る事が出来るって、優子ちゃんが言ってたの」

「へえ、そうなんだ？ そいつは知らなかったな」

俺は勉強机の上に置いておいた宿泊券を手にとって見てみた。

すると、なるほど確かに、宿泊券の隅の方に小さく『一泊二日五名様まで』と書かれてあった。

「今、宿泊券を確認してみた。春菜の言う通り、確かに一泊二日五名様までって書いてあったよ。だけど、それがどうかしたのか？」

「あつ、うん。え、えつとね……。うんとね……」

ん？ 何だか分からないけど、春菜のやつちよつと言いあぐねてるって感じだな。

「何だよ。何か言いたい事があるなら、はっきり言って構わないぞ」

「あつ、ごめんねつ。拓ちゃんに、変な気を使わせちゃって」

「いって、いって。それより、一体どうしたんだ？」

「うん、えつとね……。実はね……。拓ちゃんが優子ちゃんから貰った宿泊券で五人まで旅館に泊れるでしょ？」

「ああ。それは、さっき確認したぞ」

「うん。そ、それでね……。も、もし、拓ちゃんと夏香ちゃんと冬香ちゃんが良かったらなんだけど……。その温泉旅館に……」

わたしと秋穂ちゃんも、一緒にお泊りさせてもらったら駄目かな？
て、思ったの……。 あっ！ だ、駄目なら別にいいからね！」
なるほど、そういう事か。

春菜のやつ、そんな事なら別に言いあぐねる事でもないだろうに。

「俺は別に構わないぞ。どうせ、二人分の空きがある訳だし。それと、夏香も冬香もオ－ケーだと思うけど、一応あとで二人にも確認してみるよ」

「うん。ごめんね拓ちゃん、急に色々和我がままな事を言っちゃって」

「その程度の事、別に気にするなって。それじゃあ妹たちに聞いたら、今度は俺の方から春菜の携帯に電話するよ」

「うん、わかった。申し訳ないけど、お願いね」

「ああ。そんじゃまあ、また後でな」

「うん」

俺は電話を切ったあと直に部屋を出て、妹たちの部屋へと向かった。

部屋の中に入ると、夏香はベッドの上で雑誌を読んでおり、冬香はいつもと同じく勉強机の椅子に座って本を読んでいた。

「何、兄貴？ どうしたの？」

「いや、俺が貰った温泉旅館の宿泊券があるだろ？ あれさ、実は

あの券一枚で五人まで旅館に泊る事が出来るんだよ」

「ふうん、そうなんだ？」

「その事なら・・・わたしは知ってた・・・。宿泊券に・・・そう書いてあったから・・・」

「お、そ、そうか。冬香は、知ってたのか」

流石は冬香・・・って、俺がちゃんと見ていなかったただけってやつか？

「兄貴、五人泊れる事が一体何なの？」

「ああ、それでな。その事で、さっき春菜から電話があつて、春菜と秋穂ちゃんも俺たちと一緒に温泉旅行に行きたいって事なんだけど？俺は別に構わないって言ったけど、夏香と冬香はどうだ？」

「あたしは、全然構わないよ。むしろ、春菜さんと秋穂だったら大歓迎だしね」

言っておくが、夏香が言った秋というのは秋穂ちゃんの事だぞ。夏香は小さい時から、秋穂ちゃんの事を秋と呼んでいるからな。

「わたしも・・・別にいい・・・。春菜さんと秋穂以外の人だったら・・・嫌だけど・・・」

「冬香、それなら心配いらなぞ。間違はなく、春菜と秋穂ちゃんの二人だけだからさ」

「うん・・・」

「よし、それじゃあ、春菜には夏香と冬香も賛成って事を伝えておくからな」

「それでいいよ」

「わたしも・・・それでいい・・・」

「よし、了解」

そして、妹たちの部屋を出た俺は自分の部屋へと戻り、早速携帯で春菜にその旨を伝えた。

春菜のやつ、凄く喜んでいたなあ。

まあ、俺も春菜と秋穂ちゃんが俺たち兄妹と一緒に温泉旅行に行けるなんて、めっちゃ嬉しいけどさ。

二人の可愛い妹と、二人の可愛い幼馴染みの浴衣姿・・・。

そ、それに・・・。

も、もしかしたら、みんなで一緒に混浴露天風呂に・・・ってな事も・・・。

あっ!?!? や、やべっ! 変な想像したら、は、鼻血が出てきそう!?!?

俺は急いで、ティッシュを丸めて鼻に突っ込んだ。

ま、まったく! な、何、不謹慎な事を考えてやがる! 俺はアホか!?!? 変態か!?!?

・・・て、流石に変態は嫌だな。

ま、まあ、だけど、今から温泉旅行が楽しみなのは変わらないからな。

ようし! 夏香や冬香、それに春菜や秋穂ちゃんの為にも、絶対

楽しい温泉旅行にしてやるぜ！

【Part・46】(前書き)

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

【Part・46】

空を見上げれば、満天に輝く星々の煌めき……。

目を閉じて耳を澄ませば、風そよぐ木々の音と川のせせらぎ……

そして……。

「身も心も温まり癒す事の出来る混浴露天風呂！ うひゃく！ 露天風呂、最高！！」

やっぱり、温泉って最高だよなあ。

来て良かった。

俺は心地の良い気分でゆったりと、石で造られた湯船の温泉に浸かっていた。

「ああ、気持ちいい、このまま天国まで行ってしまいそうだよ」

暫くの間、温泉に浸かりながら日頃見る事の出来ない綺麗な夜空を眺めていた俺だったが……。

「ふう……」

俺は小さな溜息をついたあと、首を左右に振って辺りを見回してみた。

けどなあ……。

「この露天風呂は混浴にも拘らず、女の子が一人もいないじゃねえか！」

ていうか、余裕で泳げるくらいの広さがあるこの露天風呂に俺以外誰もいないって……。

まあ、これはこれで俺たちの貸切って考えれば別に悪くはないけど。

男はいなくてもいいんだけど、女の子は一人くらいいてくれてもいいのになあ……。

てか、よく考えたら別にどうでもいいのか。

可愛い女の子なら、既にいるわけだし。

それにしても、その可愛い女の子である夏香と冬香はどうしたんだ？

それから春菜と秋穂ちゃんもいないみたいだけど？

四人とも、まだかなあ……早く来ないかなあ……。

べ、別に、可愛い妹たちと可愛い幼馴染みたちの、は、裸が見たいわけじゃないからな！

だ、断じて、そんな邪な気持ちなんてものは……。

「拓ちゃん」

俺はそう呼ばれて、半ば反射的に後ろを振り向いた。

そして振り向いた先には、大きな白いタオルを一枚体に巻いただけの春菜が、いつもの屈託のない笑顔を俺に向けて立っていた。

春菜の今の姿はタオルによって胸から股下までを隠しているといった感じなのだが、そのタオルを取ってしまえば裸同然の状態になってしまう。

そんな春菜の姿を見た瞬間から、俺の胸のドキドキは一向に治まる気配がなかった。

「あ、あのね、拓ちゃん？ 拓ちゃんの隣に・・・座ってもいいかな？」

春菜は少し頬を赤らめ、恥ずかしいのか俺とは視線を合わせないようにしながら聞いてきた。

「お、おう、別に構わないぞ」

俺は、今の春菜の姿をまともに見る事が出来ず、前を向いたままで答えた。

「それじゃあ、入るね」

そう言うと、春菜はゆっくりとした動作で湯船の中に足を入れ、温泉の中へと入った。

そして、体に巻いたタオルが解^{ほど}けて落ちないように手で押さえながら、静かに俺の右隣に腰を下した。

【Part・47】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

「星……綺麗だね」

そう言った春菜は、満面の笑みを浮かべながら夜空を見上げていた。

「あ、ああ。た、確かに綺麗だよな。俺たちの住んでる所じゃあ、こんなたくさんの星なんか見られねえもんなあ」

「うん、そうだよな」

それから暫くの間、俺と春菜は無言のままに無数の星で埋め尽くされた幻想的な夜空を眺めていた。

な、何か駄目だ。

いつも通りに、春菜と会話が出来ねえ！

な、何で俺はこんなにも緊張していやがるんだ！？

ここが温泉で、今は二人だけしかないからか？

それとも、春菜が体にタオルを一枚だけしか身に付けていない、

普通では絶対に拝む事の出来ない格好をしているからなのか？

どっちもありっぱいけど、わっかんねえ〜！

「ねえ、拓ちゃん？」

俺が春菜との会話の事で色々と思えばぐねていると、そんな俺の気持ちを知ってか知らずかは分からないが、春菜の方から話し掛けてくれた。

と思いきや、は、は、春菜が・・・!?

春菜が自分の腕を・・・お、俺の右腕に・・・。

か、か、絡めてきたー!

ど、ど、ど、ど、ど、どうしょおおおー!?

お、俺の心臓が、す、凄い速さで、みゃ、みゃ、脈打っているんですけど!

「拓ちゃんは、何も身に付けていないんだね」

「は？」

俺が何も身に付けてない?

何も身に付けてないって、どういう事だ?

ここは温泉なんだから、服を脱いで湯船に浸かるのは当然だし。

春菜が急に腕を絡めてきた事で、頭の中がパニック状態となっており、すぐには春菜の言葉の意味が理解出来なかった。

それから少しして落ち着き、どうやら俺が大事な所も隠さずに真裸な状態なんだと言ってる事が理解出来た。

混浴露天風呂で、この俺がそんな恥ずかしい事をするはずがないだろ。

「な、何言ってるんだよ。ちゃんとタオルを腰に巻いて、大事な所はしっかりと隠しているぞ」

「え? でも・・・」

と言つて、春菜は俺の股間の辺りに視線を移した。

い、いや、そうマジマジと見つめられると、もの凄く恥ずかしいんですけど。

と思いつつ、俺自身も視線を下の方に向けてみると・・・。

「うわ〜！」

と、俺は大声で叫んで、すぐさま両手で前を隠した。

な、な、な、な、何じゃこりゃー!?!?

春菜の言う通り、俺は真っ裸じゃねえか!

「ね? わたしの言った通りでしょ?」

い、いや、春菜さん? 普通に「ね?」って言われても。

それに、俺の大事な所を見たわりには、春菜のやつ・・・めっちや冷静なんですけど!?!?

ていうか、今日の春菜はいつもと違って何だか変だ!?

「あっ!」

春菜が突然手を叩いて、何かを思いついたような顔をした。

「ど、どうした!?!?」

「ねえ、拓ちゃん? 拓ちゃんって、もしかして・・・」

「な、何だよ?」

「実は・・・露出狂でしょ?」

「そんなわけあるか!」

「え? 違うの?」

「違うに決まってるだろ！」

「ふうん、そうなんだあ……」

何故そこで、残念そうな顔をする！？

「うん……。じゃあねえ……。わかったあ！」

今度は何だ？

「露出症！」

「そつちでもねえ！」

しかも、『狂』が『症』に変わっただけじゃねえか！

「え、そうなの？」

「そうなの！」

「ふうん、違うんだあ……」

何故そこで、また残念そうな顔をする！？

「でもね……。わたしは、拓ちゃんが露出狂でも露出症でもどつちでもいいよ」

そう言って春菜は、いつもの屈託のない笑顔を俺に見せてくれた。てか、俺は露出狂でも露出症でもどつちもよくねえ！

しかも春菜の中では、既に俺がどつちかの症状があるって事が決

定事項になっていやがるし！

「あ、あのね、拓ちゃん？」

「うん？ 今度は、どうしたんだ？」

このあと、まさか春菜の口から更に衝撃の一言が飛び出して来る
とは…？

【Part・47】（後書き）

今年初めての風邪を引いてしまい、今は布団の上に横になってスマートフォンを持ちながら小説を読んだり書いたりしています（^^；
最近は気温の温度差が激しく風邪を引きやすい気候となっています
ので、この作品を読んでくださってるみなさんも体を温かくして風邪には十分気を付けて下さいね。

【Part・48】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

「拓ちゃんが、何も身に付けていないのが良いなら……」

「ああ！俺は好きで真っ裸になってんじゃねえ！」

「わ、わたしも……このタオルを……」

そう言うと、春菜はその場でゆっくりと立ち上がり、体に巻かれていたタオルに手をかけた。

それを見ていた俺は、当然春菜がこれから何をしようとしているのか予想がついて、めっちゃ驚き焦っていた。

「お、おい、春菜！？　ちょ、ちょっと待て！　お、お前まさか、そのタオルを！？」

春菜は、俺の制止の言葉を聞かずに、巻かれたタオルを解き始めた。

俺は下からそれを見ていて、思わず両手で顔を覆い隠した。

それによつて、俺の大事な部分は丸出し状態なのではあるが、今はそんな事を考えてる余裕はなかった。

それから、少しして……。

「拓ちゃん……見ても……いいよ」

春菜は、今の自分の格好が恥ずかしいからなのか、少し言葉がたどたどしかった。

「い、いや、見てもいいよって言われても。さ、流石にそれは不味いだろ？」

「大丈夫だよ。わたし、拓ちゃんにだったら……。拓ちゃんにだつたら、見られてもいいもん」

「み、見られてもいいもんって……。で、でもなあ……。だけどなあ……」

俺は迷っていた。

ここは、素直に見るべきか？

それとも、見ざるべきか？

うーん、本音を言えば見たい。

けどなあ、もしも見てしまったら……。俺は……。

興奮して頭に血が上って、春菜を襲ってしまうかもしれない？

この俺に限って、そんな事はしないとしたい……。だけど、絶対と言いきれない自分が情けない……。

ああ！ どうしたら！？ どうすればいいんだ！？

「あのね、拓ちゃん？ わたしはね……。わたしは、拓ちゃんの全てを見たから……。見たかったから……。だ、だから、今度は……。今度は、拓ちゃんの番なんだよ」

「で、でも……。もし、俺が今の春菜を見てしまったら……。興奮して理性が壊れて……。は、春菜を……。春菜の事を……。襲ってしまうかもしれないんだぞ？」

「……。うん、いいよ。それでも、わたしはいいよ」

いいよって、何でそんな簡単に言えるんだよ？
何で、そんな簡単に……。

「拓ちゃんだから……。拓ちゃんにだったら……わたしは、何をされてもいいよ」

春菜……。

お前、もしかして……俺の事を……。

「だからね……。だから拓ちゃんに……わたしの全てを……見て欲しいの」

こ、ここまで女の子に言わせておいて、何もしなかったら……男じゃないよな？

そうだ……男じゃない……男じゃねえ！
よっしゃー！

御堂拓也！ 本日、男の中の男にいいい〜！
なりやす！！

そして、俺は顔を覆い隠していた両手を退けて、堅く閉ざしていた^{まぶた}瞼をゆっくりと開いた。

【Part・49】（前書き）

下手な文章で申し訳ありませんが、少しでも面白いと感じて頂けたら嬉しいです。

俺は意を決して瞼を開いた。

そして、俺の目には春菜の生まれたままの姿が映るはずだった・
・のだが。

うん？

あれ？

何にも見えないぞ？

いや、正確には見えているんだよな・・・湯気が。

何でかは分からないけど、いつの間にかこの露天風呂全体にももの
凄い湯気が立ち籠めていて、どこを見ても大量の湯気に遮られ俺の
視界は白一色に染まっていた。

そついや、春菜はどこにいるんだ？

まったく見えないぞ。

「な、なあ春菜？ 春菜は、今どこにいるんだ？」

「わたしなら、拓ちゃんのすぐ傍にいるよ。だから、早くわたしを
見て」

春菜の声が近くから聞こえる。

なのに、どこから聞こえて来るのかが、まったく分からねえ。

何なんだ、コレ？

一体、何がどうなっていていやがる？

「兄さん・・・」

え？ 冬香？

「わたしも・・・兄さんに・・・見て欲しい・・・」

「ふ、冬香？ 冬香なのか？ 冬香も、そこにいるのか？」

あの声は、冬香で間違いないはずだ。

だ、だけど、冬香からの返事がないのは、どういう事なんだ？

「おゝい、春菜、冬香、どこにいるんだあ？ 頼むから、返事をしてくれ」

俺が春菜と冬香に呼び掛けながら露天風呂の中を彷徨い歩いていると、また誰かが俺を呼んでる声があった。

「拓也さん！ わたしも見て欲しいんです！」

この元気一杯の声は、秋穂ちゃんの声だ。

「おゝい、秋穂ちゃん！ どこにいるんだあ！？」

また返事がない。

何で、みんな返事をしてくれないんだ？

「おゝい、みんな！ 返事をしてくれー！」

くそ！ 何なんだよ、この湯気は！？ 一向になくなる気配がないじゃねえか！

これじゃ、目と鼻の先すらよく見えねえっての！

「あ、兄貴、すつごく恥ずかしいんだけど……。あ、あたしも、見てくれないかな?」

今度は、夏香の声だぞ。

「お〜い、夏香〜! どこだ〜!? いるなら返事をくれ〜!?」

みんな、どこだ?

どこにいるんだ?

頼むから、返事をしてくれ……。。

「拓ちゃん、わたしはここだよ。だから、早くわたしを見て」

「兄さんに……。この姿を……。見て欲しい……。。」

「拓也さん! 生まれたままのわたしを見て下さい!」

「あ、兄貴、ずっとこんな格好してるの恥ずかしいんだから……。早く、あたしを見てよね」

みんなの声は聞こえるのに、この湯気のせいで何にも見えやしねえ!

「みんな! ちょっと待ってくれ! この俺だつて……。この俺だつてなあ! みんなの裸が見たいんだ〜!!!!」

と言った瞬間、突然俺の腹にボーリング玉を上から落とされたよ
うな衝撃が走った。

「ゲヘッ! ゲホッ!」

俺は腹を押さえて悶絶した。

い、一体、何が起きた!?

「ちよつと、誰の裸が見たいって?」

「え?」

声のした方を見てみると、夏香が部屋着姿で両手を腰にあてて不機嫌そうな顔をして立っていた。

「な、何だよ、夏香、そんな所にいたのか。・・・って、あれ? だけど、何でお前は裸じゃないんだ?」

「何であたしが裸じゃないと、いけないのかしらねえ?」

夏香が拳を握りしめて、怒っているといった感じなのだが・・・。

「い、いや、だって、ここは温泉・・・ん?」

あれ? ここはどこだ?

何だか、いつも見慣れている景色が・・・って!?

何だよ! ここは、俺の部屋じゃねえか!

「ふうん。エロ兄貴は、もう一発殴られないと目が覚めないのかしらねえ?」

「い、いや、もう大丈夫だ! ここは、俺の部屋だ! もうすっかり目が覚めたから大丈夫だぞ!」

「もう、早く着替えて出掛ける準備をしてよね。今日は、みんな温泉に浸かりに行くんだから」

「お、おう、分かった。すぐに準備するよ」

あの非常にうれしい出来事が夢であったとは……トホホ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1720s/>

俺による、俺のための妹育成計画！

2011年11月20日19時47分発行